

琉球大学学術リポジトリ

漁民のサンゴ礁漁場認識：
大田徳盛氏作製の沖縄県南城市知念「海の地名図」
を読む

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2015-12-09 キーワード (Ja): 語構成, 微地形, 海産生物, 漁撈活動, 結節地名 キーワード (En): 作成者: 渡久地, 健, 西銘, 史則, Toguchi, Ken, Nishime, Fuminori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32848

漁民のサンゴ礁漁場認識

——大田徳盛氏作製の沖縄県南城市知念「海の地名図」を読む——

渡久地 健*・西銘 史則**

Some Aspects of Fishermen's Perception of Fishing Grounds: A Study of Place-names in the Coral Reefs of Nanjo City, Okinawa Island

Ken TOGUCHI and Fuminori NISHIME

要 旨

きわめて稀有なことであるが、今から 35 年も前の 1977 年に、南城市知念の漁民の手によって自らの漁場の地名図が作られた。そこにはおよそ 200 の地名が記載されてある。縁あって、この地名図を分析することになった筆者らは、まずは地名図に記されている地名語彙を整理し、一つ一つの地名の意味を解明することをめざし、その海に詳しい漁民からの聞き書きを重ねることとした。

南城市知念のサンゴ礁は、沖縄島のなかで最も幅広いサンゴ礁の一つであり、広大なイノー(浅礁湖)には多様な微地形がみられ、その微地形を巧みに利用した網漁など、さまざまな漁撈活動が営まれてきた。地名語彙を分析した結果、全体の 3 分の 2 の地名に語基として地形語が組み入れられていることがわかった。その地形語彙は、未詳語を除いても 30 種類を超えている。

地名の接頭辞として最も多いのは、「陸上地名」ではなく海のなかの「周辺地名」であった。他の地域では「陸上地名」を海に延長して名づけが施されている割合が比較的高いが、南城市では、サンゴ礁の海にある「周辺地名」から分岐・派生して命名された地名が最も多く全体の約 21%にも及んでいる。また、1 つの地名から最大 4 つの地名が分岐している。分岐した地名を起点にしてさらに別の地名を生成しているケースが 4 例あった。広大なサンゴ礁空間では、そのような命名法による地名形成が有効であったと考えられる。また、海産生物を接頭辞とする地名が 17%、漁撈活動にちなむ地名が 4%である。

地名は単なる記号ではなく、地名のなかにはサンゴ礁の微地形、水産生物、漁撈活動などさまざまな海の知識が織り込まれている。地名を知っていることは、漁場知識を獲得していることでもある。サンゴ礁の特定の場所に付けられた地名 (place-names) のなかには、その場所 (places) に向けられた漁民たちの視線——漁場認識——が読みとれる。

キーワード：語構成、微地形、海産生物、漁撈活動、結節地名

* 琉球大学

** (株)沖縄環境分析センター

はじめに——託された一枚のサンゴ礁地名図

本稿の目的は、サンゴ礁漁場に付けられた数多くの地名（固有名詞）を分析することによって、サンゴ礁で漁をしてきた漁民たちの漁場認識の一端を明らかにすることである。分析対象の地名は、執筆者の一人、西銘が南城市知念字志喜屋の漁民、大田徳盛氏（故人、1921-2008）から分析・研究を託された「旧・知念村サンゴ礁地名図」（仮称）に書き込まれた約 200 の海の地名である。

仮称「旧・知念村サンゴ礁地名図」（以下、単に「地名図」という）は、図 1 に示す範囲をカバーしている。その地名図は縦 60 cm、横幅 175 cm で、航空写真をトレースした線描をベースマップにして、その上に一連番号（1~190 番）と地名を記載している。図 2 は、その一部である。地名図には番号を付されてない地名が 5 個あり、合わせて 195 の地名が記されている。また、地名図の左側に地図上の 190 地名の一覧表（以下「一覧表」という）があるが、地図上と一覧表との間には表記上のちがいがみられる地名が少なくない⁽¹⁾。地名図を作ったのは大田氏であるが、図には「協力者」として漁民ら 8 人（明治生まれ 4 人、大正生まれ 3 人、昭和初期生まれ 1 人）の名前も記されている。

サンゴ礁地名を手がかりにして漁民の漁場認識を明らかにするには、地名の語構成を明らかにする必要があるが、「地名図」と「一覧表」には、地名番号と地名のみが記されていて、地名の語意や、地名の付いている場所の環境などの説明は与えられていない。地名の語意がわからなければ、語構成は明らかにできない。それゆえ、地名図の分析の前に、われわれは、地名の語意について漁民から聞き取り調査を行なう必要があった。漁民の漁場認識を動的に把握するには、漁撈活動についての聞き取りと参与観察が求められるが、これは今後の課題として、本稿では地名語彙の語構成の分析表を提示し、この表から読み取れることからの一端を報告するに止める。

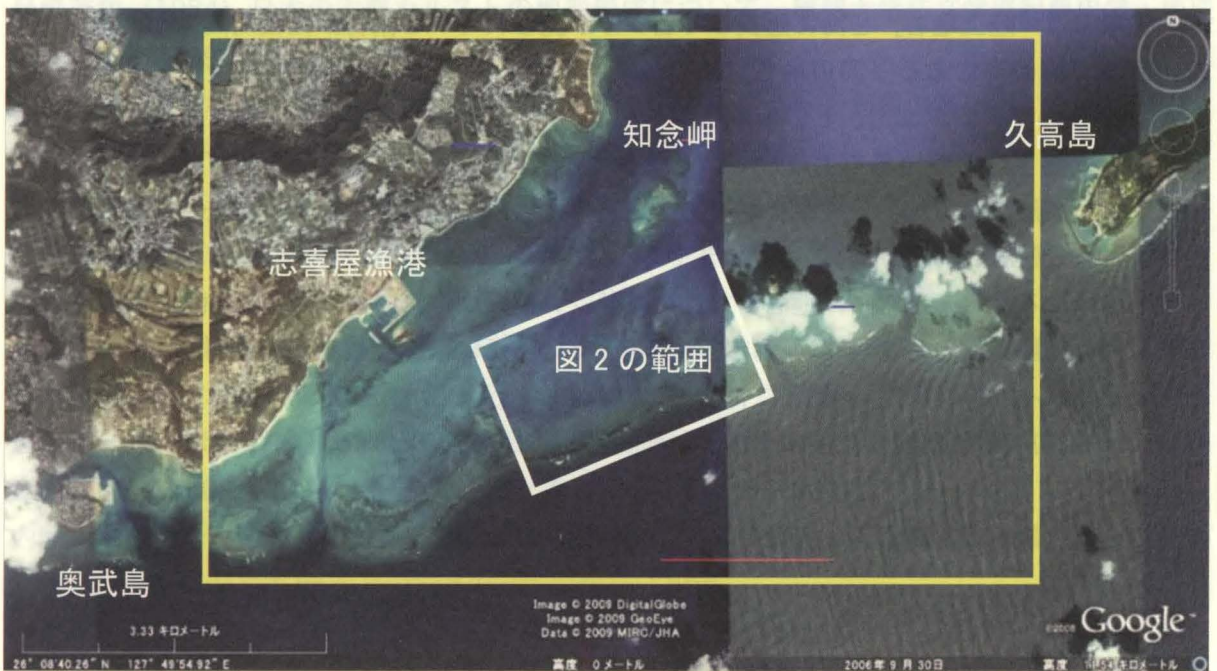


図 1 「地名図」の範囲（大きな四角）

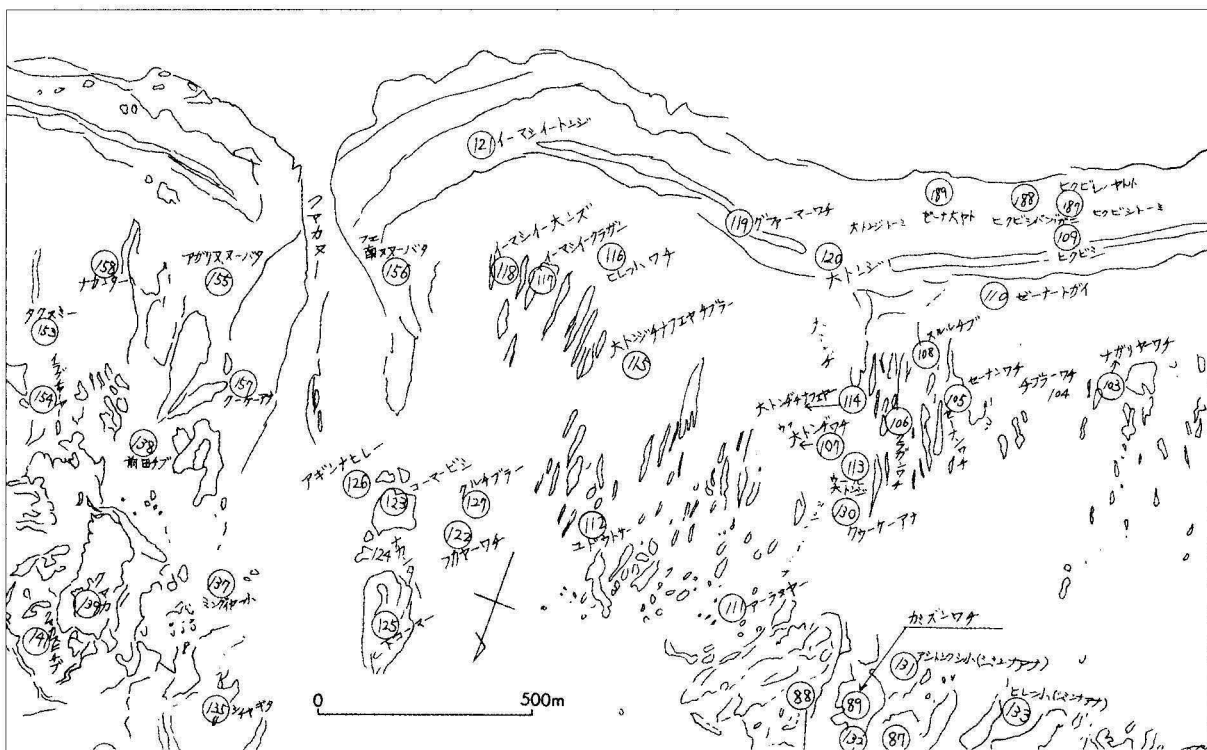


図 2 大田徳盛氏作製の「地名図」の一部。この部分図の範囲は図 1 の小さな四角の部分。「地名図」は南を上にして作製されている。なお、図中の方位とスケールは筆者らによる

1. 「地名」という知識⁽²⁾

私たちは日常生活のさまざまな場面で地図を利用している。自家用車のなかには道路地図が入っていて、行き先を確認するのに使われる。催し物の会場をパソコンで調べることも少なくない。山歩きに出かける人の多くが国土地理院発行の地形図を携行する。地図は、使用目的によってさまざまな種類があるが、そこに記載されている文字情報のほとんどを地名で占められている。私たちは、意識するしないにかかわらず、「地名」なしには生きられないのだ。たとえ地図を実際に使用しないにしても、私たちの心（頭）のなかには、日々変容（増殖・更新）し続ける、各人異なる地図がある。そのメンタルマップの上にも地名が多く刻まれている。紙の上であれ、液晶画面上であれ、心（頭）のなかであれ、そこに書き込まれている「地名」(place-names)は、日々の生活に欠かせない、「場所」(place)にかんする情報である。

漁民たちもサンゴ礁漁場のなかに無数の場所情報（漁場知識）をもっている。ゆえにサンゴ礁空間にも無数の地名が刻まれることになる。日常の生活にかかわりの深い地名のほとんどは、市販の地図に記されている。メンタルマップのなかの地名も、そのほとんどは市販の地図にも記されている。しかし、市販の地図には決して記されることのない地名がある。その一つがサンゴ礁の上に刻み込まれた微細な海の地名である⁽³⁾。

2. 本稿の方法

2.1. 地名の構成

地名は、具体的な場所に付けられた固有名詞である。地名は、一般につぎのような構成をとっている（渡久地 2011、p. 254）。固有名詞たる地名は、例外はあるが、語基⁽⁴⁾として普通名詞を含みもっている。逆に言えば、普通名詞に接頭辞が付いて地名となる。

$$\boxed{\text{地名 (固有名詞)}} = \boxed{\text{接頭辞}} + \boxed{\text{語基 (普通名詞)}}$$

サンゴ礁地名からいくつか具体例を示す。ナハビシ（沖縄島本部町）、フーグチ（奄美大島大和村）、イシキワタンジ（久高島）、トホゴモリ（奄美大島大和村）。下線を施した部分は語基である。ナハビシの「ナハ」は「中」、「ヒシ」は「干瀬」は「礁嶺」を意味し、地名の意味は「真ん中の礁嶺」となる。フーグチでは、「フー」は「大きい」、「クチ」（口）は「舟の出入口」（サンゴ礁の切れ目）を意味し、「大きな口」という語意となる。イシキワタンジでは、「イシキ」（伊敷）は海岸地名、「ワタンジ」（渡地）は海岸と礁嶺（リーフ）を結ぶブリッジ状の地形を指示する地形語である。トホゴモリでは、「トホ」は「タコ」、「ゴモリ」（小堀）は凹地を意味する地形語である。

むろん例外⁽⁵⁾はあるが、ある土地（海）に付けられている地名、とりわけ微細地名（不記載地名）の多くは、何世代にもわたってその土地（海）とかかわって生きてきた人々が授けた地名である。サンゴ礁地名は、そのサンゴ礁の海を漁場として利用してきた人々——このなかには非専業漁民が含まれるが、本稿では一括して「漁民」とよぶ——が与えた地名である。ある土地（海）に対してよび名を与えるという行為（命名行為）には、その土地（海）に対して向けられる人々の眼差し、環境認識（environmental perception）が反映するであろう。それゆえ、地名を手がかりにして、漁民のサンゴ礁漁場認識の一端を明らかにできると考えられる⁽⁶⁾。

2.2. 本研究の方法

地名を手がかりにして、漁民のサンゴ礁漁場認識を明らかにするためには、前述のとおり、地名を構成する接頭辞と語基の意味を解し、地名の付けられた場所の自然環境を把握していなければならない⁽⁷⁾。

「地名図」には 195 のサンゴ礁の海の地名が記されているが、そこから得られる情報は、(a) 地名の位置と (b) 地名語彙、そして (c) ベースマップの線描から読み取れる地形の概略である。地名を構成する語基の大部分は地形語であるが、これまで奄美・沖縄でサンゴ礁地形の民俗分類やサンゴ礁地名を調査してきた筆者らにとっても初めて目にする地形語が少なからず含まれていた。その地形語の意味を解き明かすために、空中写真の判読作業とともに、南城市のサンゴ礁で長年漁を営んできた、このサンゴ礁を熟知している漁民への聞き取り調査を行なった。聞き取り調査の過程で、「地名図」には記載されていない 6 つの新たな地名を採集した。「地名図」に記載されている 195 の地名と合わせて、合計 201 の地名語彙について語構成を整理したのが付表である。

この付表をもとに、漁民たちの漁場認識の一端を探るのが本稿の目的であるが、その前に南城

市のサンゴ礁の特徴について簡単に触れておきたい。なお、以下の記述において、〈 〉はサンゴ礁地名（固有名詞）、《 》はサンゴ礁漁場にかかわる方名（普通名詞）である。

3. 南城市サンゴ礁の特徴

3.1. 概観

沖縄島のサンゴ礁の幅——汀線から礁縁（reef edge）までの距離——の平均値は約 470 m であるが（目崎ほか 1977）、南城市では 1~4 km に及んでいる（字百名で約 1 km、字志喜屋で約 2 km、字具志堅で約 2.5 km、字久手堅で約 4 km）。そのため、沖合に《ヒシ》（干瀬、礁嶺 reef crest）が横たわり、その内側には広大な《イノー》（礁池 moat、または浅礁湖 shallow lagoon）が広がっている。

奥武島から久高島の手前まで伸びるサンゴ礁には、西から〈アチヌー〉（地名番号 43）、〈クマカヌー〉（155-1）、〈アラジンヌー〉（161）とよばれる 3 つの明瞭な切れ目——礁池を切る水道——がある。この 3 つの切れ目によって、サンゴ礁が 4 分割される（図 3）。この 4 つのサンゴ礁は、図 3 において、西から I、II、III、IV と番号を付してある。I の東端を〈ジーマビシ〉（72）、II の東端を〈ウフビシ〉（f）という。III は〈ナカビシ〉（e）、IV は〈ヒラビシ〉（d）とよばれている⁽⁸⁾。「地名図」を作製した大田氏の集落（字志喜屋）の前には、上の 4 つのなかで最大のサンゴ礁（II）が広がっていて、志喜屋漁民の主要な活動の舞台となっている。そのサンゴ礁（II）——〈アチヌー〉から〈クマカヌー〉までの間——の外海側にはおよそ 5 km にわたってヒシが連続する。これは沖縄島で最も長いヒシの一つであるが、その間に周辺より少し低まったところ（レベルの低い部分）が 3 ヲ所、西から〈ワナトンチ〉（68）、〈ナカトンチ〉

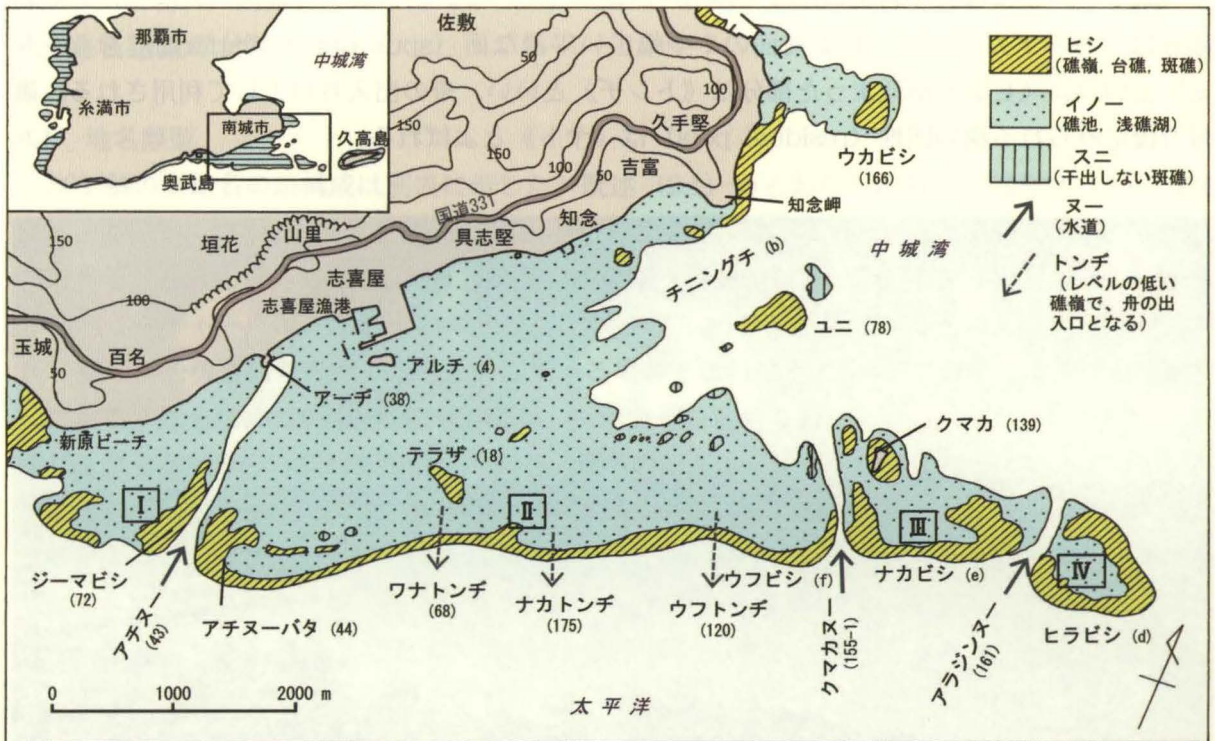


図 3 南城市のサンゴ礁の概略

(175)、〈ウフトンチ〉(120) があって、舟の出入口となっている。

〈クマカ〉(139) の西を通り知念岬の方角に伸びる深い水道〈クマカヌー〉(155-1) の奥には、〈ユニ〉(78) とよばれる短径約 400 m の台礁 (platform reef) が位置する。この台礁と知念岬の間は〈チニングチ〉(b) とよばれる幅広い深い水道 (channel) である。知念岬の北東約 1.5 km には〈ウカビシ〉(166) という南北約 500 m、東西約 250 m の干潮時に干出する台礁があり、その上に小さい洲島 (sand cay) が載っている。

3.2. 多様な微地形

志喜屋の前面に広がる広大な《イノー》は、陸上から眺めると単調な景観である (図 4)。しかし、場所によって水深が異なるイノーのなかには、さまざまな微地形がみられる。イノーのなかには、《ヒシ》とよばれ大潮の干潮時に干上がる岩盤からなる地形的高まり (斑礁 surface patch reef)、《スニ》とよばれ干上がることのない地形的高まり (暗礁 sub-surface patch reef)、《チブ/チプラー》とよばれハマサンゴなどがつくるサンゴ頭 (coral head)、また《クムイ》や《チブ》とよばれる凹地 (hollow, basin, depression)、潮流の方向にサンゴ群集が配列してつくる筋状の高まり (coral alignment)、《ンズ》《ワチ》とよばれるサンゴ群集間の溝状地形 (sandy couloir)、さらに《ヒレ/ヒレー》とよばれる岩盤からなる平たい地形、渚付近にあって満潮時に隠れ干潮時に顕れる《グフ》とよばれる岩、《ヤナ》とよばれる穴の多いゴツゴツした岩場 (crag)、などじつに多様である。さらに、《アナ》とよばれる、追込み網漁に利用される袋状または溝状の地形もある (図 5)。

イノーと外海とを分かち、干潮時に干上がる堤防状の地形も《ヒシ》という。そのヒシがイノーの方に岬状に突き出した部分を《サチ》または《トゥガイ》という。ヒシの上には、場所によって《ユイサ》とよばれる岩塊 (reef block) が転がっている。ヒシのすぐ前面 (外海側) の傾斜部分は《ハーアガヤー》、ヒシ前面のやや幅広い平滑な面 (spur upper platform) を《トミー》という。《ヒシ》が低まった部分は《トンチ》といい、舟の出入り口として利用される。礁縁背後にみられる深い凹地 (residual pool) は《ヤト》とよばれる。



図 4 南城市字志喜屋の前面に広がるサンゴ礁。右端は志喜屋漁港とアドチ島。2012 年 7 月撮影

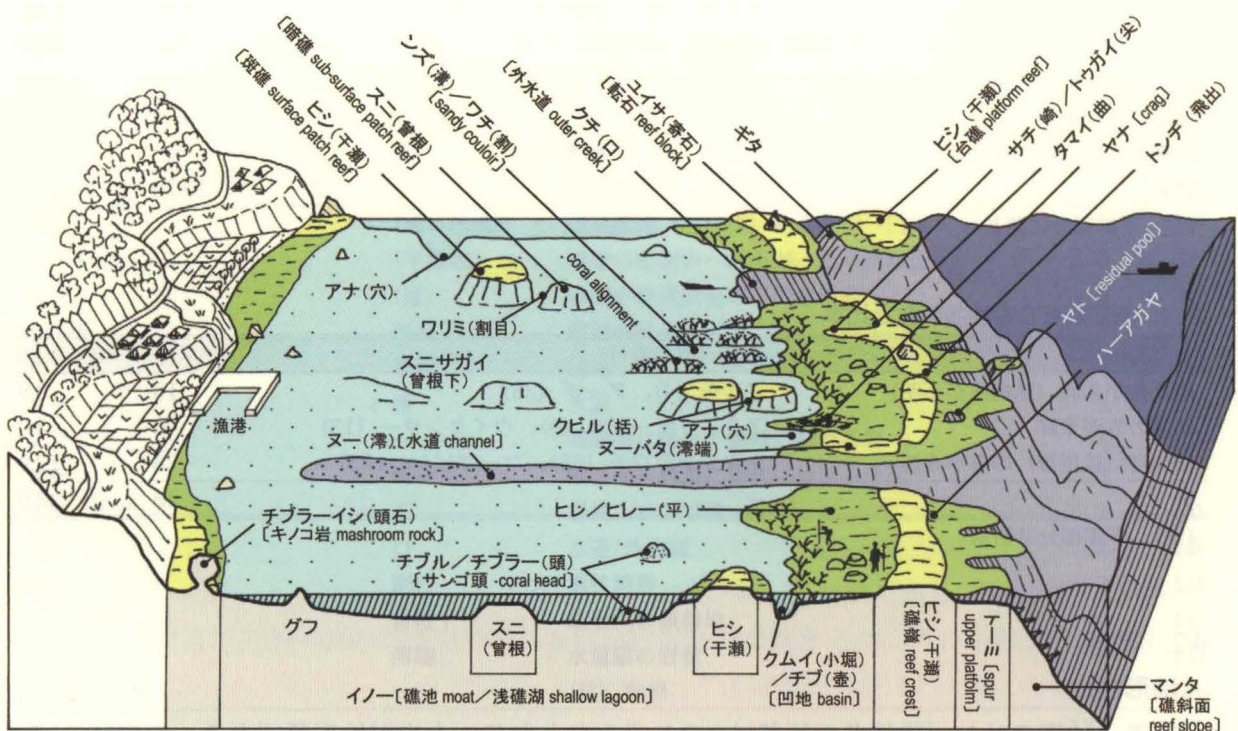


図5 南城市のサンゴ礁地形の模式図(干潮時)。カタカナは方名、丸カッコ()は当て漢字、亀甲カッコ〔 〕は地形学用語。英語表記は、Clausade et al. (1971)、Battistini et al. (1978)などを参照にした

4. 地名語彙の分析

4.1. 地名類型

201個の全地名の語構成は別表に示した。既述(2.1)のとおり、地名の大部分は(A)「接頭辞+語基」という構成をとる。たとえば、〈テラザチブ〉は〈テラザ〉が接頭辞で《チブ》が語基である。むろん例外もあり、(B)「語基」が欠落(消失)している地名も少なくない。〈テラザ〉、〈ミーチャー〉は、それぞれ《ヒシ》と《チブル》が省かれていると考えられる。逆に、(C)接頭辞を欠き語基のみで地名を成している場合もまれにある。〈チブラー〉はその典型的な例である。さらに、(D)接頭辞(接尾辞)を2つもつ地名もある。〈イピンヤーナガチブ〉は、イピンヤーとナガのいずれも接頭辞であり、地名の語意は「エビの住処になっている/長い/凹地」となる。以上の4タイプ(A~D)の地名数とその割合を表1にまとめた。地名語全体の意味が未詳のため語構成が明らかでない地名は16(全体の8.0%)で、これを除いた184を母数にすれば、南城市のサンゴ礁地名の73%が「接頭辞+語基」という基本形である。

未詳語を含む地名は表2のとおりである。上記のとおり、地名語全体の意味が未詳の地名は16、接頭辞は明らかであるが語基が未詳の地名6、逆に語基は明らかであるが接頭辞が未詳の地名26である。地名語のなかに部分的にでも未詳語を含む地名は48(全体のおよそ4分の1)である。

表 1 類型ごとの地名数と比率

地名類型	事例(地名番号)	地名数	% (対 201)	% (対 185)
A 接頭辞+語基	テラザチブ (25)	134	66.6	72.4
B 語基を欠落した地名	テラザ (18)、ミーチャー (20)	21	10.4	11.4
C 接頭辞を欠落した地名	チブラー (101)	6	3.0	3.2
D 接頭辞(接尾辞)を二つもつ地名	イピンヤーナガチブ (67)	24	11.9	13.0
小計 (A~D)	—	185	92.0	100.0
語構成が明らかでない地名	アルチ (4)、アーチ (38)	16	8.0	—
合計	—	201	100.0	—

(注) 下線部分は語基

表 2 未詳語を含む地名の数と比率

未詳部分	事例(地名番号)	地名数	% (対 201)
語全体が未詳(語構成が不明)	アルチ (4)、アーチ (38)	16	8.0
語基のみが未詳	アミイリヤグサ (9)、ウイクンサー (13)	6	3.0
接頭辞(接尾辞)のみが未詳	タキンチャワチ (65)、コーマビシ (123)	26	12.9
計	—	48	23.9

(注) 下線部分は語基

4.2. 語基

〈地形語〉

奄美・沖縄のサンゴ礁地名の語基は、2.1 でみたとおり、大半が地形語である。南城市のサンゴ礁地名でも、多様な地形語彙(前掲図 5)が地名の語基を構成していることが多い。いくつか例示するとつぎのようになる。〈ハチーグフ〉(地名番号 1)の《グフ》、〈テラザクビル〉(21)の《クビル》、〈クッチンギタ〉(31)の《ギタ》、〈モミヤマクブヌヤヒレ〉(46)の《ヒレ》、〈ヤナーラトーミ〉(55)の《トーミ》、〈ウルーワチ〉(64)の《ワチ》、〈ワナトンヂ〉(68)の《トンヂ》など。

201 地名のうち、地形語が語基に明示されている地名は、表 3 に示すように 65.2%にも及んでいる。つまり、全体の 3 分の 2 の地名のなかに地形語が組み入れられているわけで、地名を知っているということは——伊良部島佐良浜の素潜り漁師の漁場認識の研究において高橋(2004, p. 111)も指摘しているが——サンゴ礁地形にかんする「知識」をもっていることを意味する。

〈地形語以外〉

地形語以外の語基として、《ヤー》が最も多く 13 地名を数える。《ヤー》は「家(住処)」を意味するが、《ヤー》を語基にもつ地名では、その接頭辞は未詳語(2 地名)を除いてすべてが海産生物である(表 4)。ただし、〈ナカトンヂチニマルヌヤ〉(183)は、接頭辞が二つあり(二重になっていて)、一つは「ナカトンヂ」という周辺地名、もう一つが「チニマル」という魚名である。

また、〈コーチャフニザシイリー〉(48)のように、《フニザシイリー》《フニンザシイリ》《フニリンザシ》など「舟の出し入れ」「舟の入れ出し」を意味する語基をもつ地名が 5 つある(5、41、45、48、180)。その他に、「暗所」を意味する《クラガン》(82、117)、「藻場」を意味する《モーミーヤー》(165)、「穴、場所」を意味する《ミー》(153)、「タコ穴、秘密の漁のポイント」⁽⁹⁾を意味する《アデク》(150)などがある。

表 3 地名の語基になっている地形語

方名	漢字 (意味)	地形学用語、または地形の説明	数	%
ワチ	割	サンゴ群集間などの溝状地形	13	6.5
アナ	穴	凹地	12	6.0
スニ	曾根	(干出しない) 斑礁、暗礁	11	5.5
ヒシ	干瀬	礁嶺、(礁池内の干出する) 斑礁、台礁	11	5.5
チブル/チブラー/チブラーイシ	頭/頭石	サンゴ頭、キノコ岩	10	5.0
チブ	壺	凹地	9	4.5
ヒレ/ヒレー	平	岩盤からなる平坦地	9	4.5
ヤト	(深い凹地)	礁嶺前面 (外海側) にある深い凹地	7	3.5
トーミ	(平滑地)	礁嶺の前面の一段下がった平滑な面	6	3.0
ギタ	(崖)	台礁や斑礁側面などの急斜面	5	2.5
トンチ	飛出	礁嶺が低まったところ (レベルの低い部分)	5	2.5
クムイ	小堀	凹地	4	2.0
ヌー	濤	水道	3	1.5
グフ	—	満潮時に隠れ干潮時に顕れる岩	3	1.5
サチ	崎	礁嶺から礁池に岬状に伸びる地形	3	1.5
イシ、イサー	石	岩塊、サンゴ塊	2	1.0
クチ	口	水道/外水道	2	1.0
ワリミ	割目	溝状地形	2	1.0
スニサガイ	曾根下り	礁池内の傾斜地	2	1.0
ヌーバタ	濤端	水道脇の岩盤	2	1.0
その他	—	(注) 参照	10	5.0
計	—	—	131	65.2

(注) 地形の図解は図 5 を参照。「その他」の地形語として《イノー》、《クビル》(括れ)、《ヤナ》、《ユイサ》(寄石)、《トゥガイ》(尖)、《ガマ》(洞)、《シ》(瀬・石)、《ンズ》(溝)、《タマイ》(湾曲)、《ハーアガヤ》がある。%は全地名数(201)に占める割合

表 4 《ヤー》地名一覧

番号	地名	接頭辞	接頭辞の意味
11	ウルーマクブンヤー	ウルーマクブ - ン	シロクラベラの仲間(ベラ科)
16	マクブヌヤー	マクブ - ヌ	シロクラベラ (ベラ科)
36	マクブヌヤー	マクブ - ヌ	同上
40	ビタローヤ	ビタロー	ロクセンフエダイ (フエダイ科)
85	ミーラヌヤー	ミーラ - ヌ	小型のエイ
94	アガチャーヤー	アガチャー	イロブダイ (?) (ブダイ科)
98	サバヌヤー	サバ - ヌ	サメ
111	アーラヌヤー	アーラ - ヌ	マハタ、ヤイトハタなど (ハタ科)
134	アカピラヤー	アカピラ	未詳
145	シルイユヌヤー	シルイユ - ヌ	シロダイなどフエフキダイ科
148	ナカムチャガヤー	ナカムチャガ	未詳
154	イラブチャーヤー	イラブチャー	ブダイ科
183	ナカトンチチニマルヌヤ	ナカトンジ/チニマル	周辺地名/テングハギ (ニザダイ科)

(注) 16 と 36 は同名の地名である

4.3. 接頭辞

つぎに地名を構成する接頭辞および接尾辞 (以下、単に「接頭辞」という) をみることにしよう (表 5)。

最も多い接頭辞は「周辺地名」であり、これは南城市のサンゴ礁地名の大きな特徴であり、次

節(5.「周辺地名」を用いた命名法)で詳述する。

2番目に多いのが「海産生物」で、これはサンゴ礁地名の特色の一つであるが、南城市では特にその比率が高い。「海産生物」を接頭辞とする地名の語基は、前掲表4に示した《ヤー》(家=住処)が最多(13地名)であるが、他に《ヒレ/ヒレー=平》(3地名)、《チブ=壺》(2地名)、《ワチ=割》(2地名)、および《サチ=崎》《スニ=曾根》《アナ=穴》《ミー=穴》《ヌー=濤》《ヤト=深い窪地》(各1地名)となり、凸地形よりも凹地形が目立つ。

3番目の「サイズ」では、「大きい」を意味する「ウフ」が8地名、「小さい」を意味する「グワー」が15地名である。「グワー」は、英語の starlet、islet、booklet など、名詞に付ける指小辞「-let」に相当する琉球語独特の接尾辞である。

そのあと、4番目の「位置関係」、5番目の「形状」が続く。

6番目に多い「漁撈活動」はサンゴ礁地名に特徴的な接頭辞である。そのような地名として〈アミイリヤーチブ〉(網を入れる壺:地名番号8)、〈ウミナガサキヌ-シミンナ-アナ〉(海長崎の潜み縄漁をする穴:80)、〈ユドウトサー〉(網を四度移動する[語基欠落]:112)、〈ウフトンヂ-チナフェ-アナ〉(ウフトンヂの縄延をする穴:114)、〈ハンブンガキー〉(網を半分掛ける[語基欠落]:151)などがあり、網漁や延縄漁にちなむものが多い(以上、下線部分が接頭辞。以下同様)。

7番目の「人名・屋号」は、その地名の付いた漁場とのかかわりの深い漁民の苗字または屋号

表5 接頭辞の種類

	事例(地名番号)	語構成	数	%	備考
1. 周辺地名	テラザクビル (21)	テラザ・括れ	42	20.9	「陸地地名」を含まない
2. 海産生物	ススルチブ (108)	キビナゴ・壺	34	16.9	魚類23、サンゴ5、エビ2
3. サイズ	ウフズニ (91)	大きい・曾根	23	11.4	大8、小15
4. 位置関係	メービシ (51)	前・干瀬	12	6.0	上中下8、内外2、前後2
5. 形状	イピンヤーナガチブ (67)	エビの住処・長・壺	11	5.5	長短、平たいなど
6. 漁撈活動	アミイリヤーチブ (8)	網を入れる・壺	8	4.0	
7. 屋号・人名	メーダチブ (138)	前田・壺	7	3.5	
8. 陸上地名	シケヤスニグワー (29)	志喜屋・曾根・小	7	3.5	
9. 性状	クラガマー (59)	暗い・洞	7	3.5	
10. 方位	アガリヌヌーバタ (155)	東の・濤端	5	2.5	南3、東2
11. 色彩	シラチブル (25)	白い・サンゴ頭	5	2.5	黒3、赤1、白1
12. 潮・波	ナガリヤーワチ (103)	(潮が)流れる・割	4	2.0	
13. 地形	スニチブ (149)	曾根・壺	3	1.5	
14. 動詞	イチフチャー (96)	息吹く・(語基欠落)	2	1.0	
15. 数詞	ミーチャー (20)	三つの・(語基欠落)	2	1.0	
16. その他	ヤマトクチグワー (71)	倭口小	2	1.0	遠隔地名、道具
小計	—	—	175	87.1	(注)
未詳	—	—	31	15.4	
欠落	—	—	8	4.0	
語構成未詳	—	—	17	8.5	
全地名数			201	100.0	

(注) 下線は接頭辞(または接尾辞)を意味する。%は全地名数(201個)に占める比率。1つの地名に2つの接頭辞(接尾辞)をもつケースがあるため、接頭辞の合計は全地名数より多くなっている。「未詳」のなかには、「屋号・人名」と思われるものが7つ、「海産生物」と思われるものが4つ含まれる。「屋号・人名」と「海産生物」の数字は表示した数字より大きい可能性が高い

と思われる。

8 番目の「陸上地名」を接頭辞にもつ地名とは、たとえば〈シケヤヌスニグワー〉(志喜屋の小さな曾根：29) のように、陸上地名をサンゴ礁の海に延長して命名した地名である。南城市のサンゴ礁地名においては、後ほど具体的にみるように、接頭辞に「陸上地名」を用いている地名は比較的少ない。

5. 「周辺地名」を用いた命名法

5.1. 接頭辞としての「陸上地名」と「周辺地名」

前節で触れたように、南城市のサンゴ礁地名では、「陸上地名」を接頭辞とする地名は比較的少なく、「周辺地名」を接頭辞とする地名は最も多く全体の 20.9% を占める。サンゴ礁地名(海の地名)において、接頭辞として「陸上地名」を用いた地名とは、陸上の地名を海に延長して命名された地名である。一方「周辺地名」を接頭辞にもつ地名とは、(陸上ではなく)サンゴ礁の海のなかにある別の地名(周辺地名)を接頭辞とする地名である(図 6)。

比較参考までに述べると、久高島のサンゴ礁地名 154 のなかに「陸上地名」を接頭辞とする地名が 42 (27.3%)、「周辺地名」を接頭辞にもつ地名は 7 (4.5%) である(高田普久男・渡久地、未発表資料)。奄美大島大和村東部では、116 のサンゴ礁地名のうち、「陸上地名」を接頭辞にもつ地名が 17 (14.7%)、「周辺地名」を接頭辞とする地名は 12 (10.3%)⁽¹⁰⁾ である(渡久地 2011a)。久高島と奄美大島大和村のサンゴ礁は幅が狭く、いずれも広いところで 300 m 程度にすぎない。狭いサンゴ礁においては、サンゴ礁の地名は陸上地名を延長するかたちで命名することが比較的容易であると考えられる。

南城市のサンゴ礁地名においては、なぜ接頭辞に「周辺地名」が多く、「陸上地名」が少ないのであろうか。それは、南城市のサンゴ礁の特徴(3 節)と大きく関係していると考えられる。南城市のサンゴ礁幅は数 km もあり、ヒシ(礁嶺)の内側には広大なイノー(礁池、浅礁湖)が広がっていて、そこには多様な微地形がみられる。海岸近くの地名では、陸上の地名を海に延

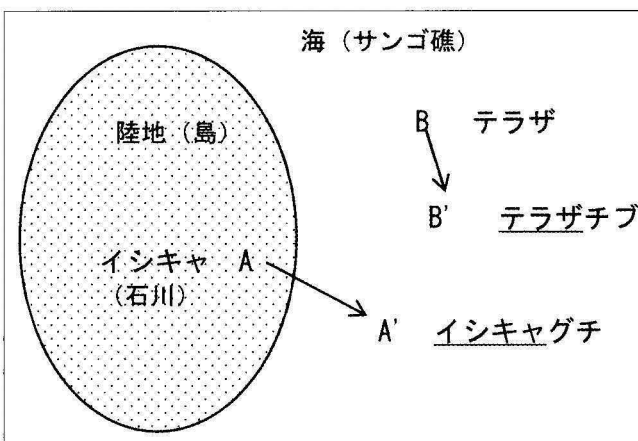


図 6 「陸上地名」と「周辺地名」を接頭辞とする地名。A' は A という「陸上地名」を接頭辞とする地名。B' は B というサンゴ礁内の別地名(「周辺地名」)を接頭辞にもつ地名である。A、A' は大和村東部の地名、B、B' は南城市の地名

長して命名することができる。たとえば、志喜屋漁港の近くにある満潮時に水面下に隠れ干潮時に顕れる岩に付けられた地名〈ハチーグフ〉(地名番号 1)では、陸上地名〈ハチー(鉢嶺)〉が接頭辞となっている。海岸から遠く離れたところでは、陸上地名を海に延長して命名することは難しくなると考えられる。「陸地地名」を接頭辞とする 7 地名のうち、海岸から遠く離れた地名は、志喜屋沖合の礁嶺にある〈ワナトンチ〉(68)のみである。

5.2 「結節地名」と「分岐地名」

幅広いサンゴ礁の海においては、陸上地名を延長するかたちで地名を生成するには限界がある。そこでは、海のなかの周辺地名を起点(足掛り)として(周辺地名から延長されて)名づけが施されているケースが少なくない。

図 7 は、志喜屋の南東に位置する〈テラザ〉(18)という地名と、「テラザ」を接頭辞とする地名群〈テラザグサ〉(17)、〈テラザグムイ〉(a)、〈テラザチブ〉(23)、〈テラザクビル〉(21)の関係を表した図である。この場合、ほかの地名の起点となり、それら地名を結節している〈テラザ〉を、本稿では「結節地名」(nodal place-name)と仮称する。それに対して「テラザ」という周辺地名を接頭辞にもつ地名を〈テラザ〉の「分岐地名」(blanched place-name)と仮称する。

図 8 は、知念岬の南東にある台礁の上の小島〈クマカ〉(139)と、「クマカ」を接頭辞にもつ地名である。〈クマカギタ〉(142)と「クマカヌー」(155-1)の接頭辞は周辺地名「クマカ」である。〈クマカスニチブ〉(141)の接頭辞は〈クマカスニ〉(c)である。じつは、大田氏が作製した「地名図」には〈クマカスニ〉は記載されていない。〈クマカスニチブ〉という地名がある以上、命名の構造上、〈クマカスニ〉がなければならない。そこで、漁民に「〈クマカ〉の近

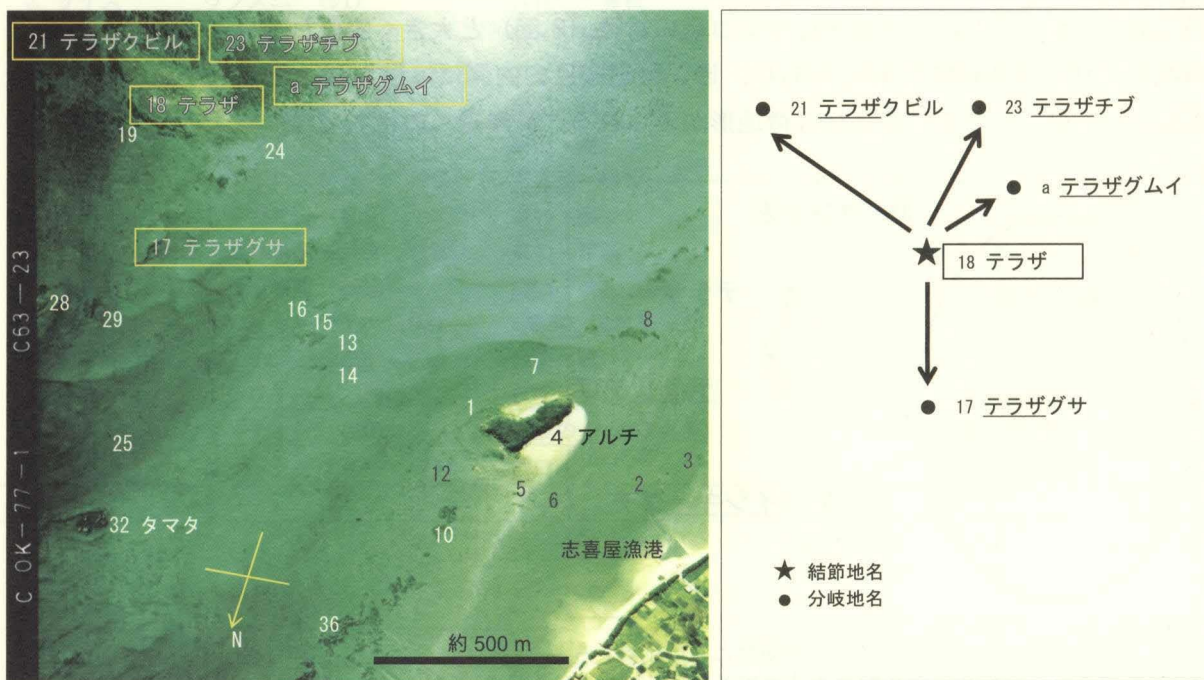


図 7 結節地名と分岐地名。左図は地名分布図、右図は〈テラザ〉と〈テラザ〉を接頭辞とする地名。左図に付した番号は地名の付いた位置を示し、付表の地名番号と対応している。右図で〈テラザ〉を「結節地名」、それ以外を「分岐地名」と仮称する

くに〈クマカスニ〉という地名はありませんか」と訊ねると、「それは〈クマカ〉周辺浅瀬だ」という答えが返ってきた。

「地名図」には〈ヒラビシ〉(d)が記載されていないが、「ヒラビシ」を接頭辞とする地名〈ヒラビシクークェアナ〉(162)と〈ヒラビシアガリンカヤー〉(163)がある以上、〈ヒラビシ〉がなければならない。この〈ヒラビシ〉も地名図を整理したうえで漁民への聞き取りを行なって

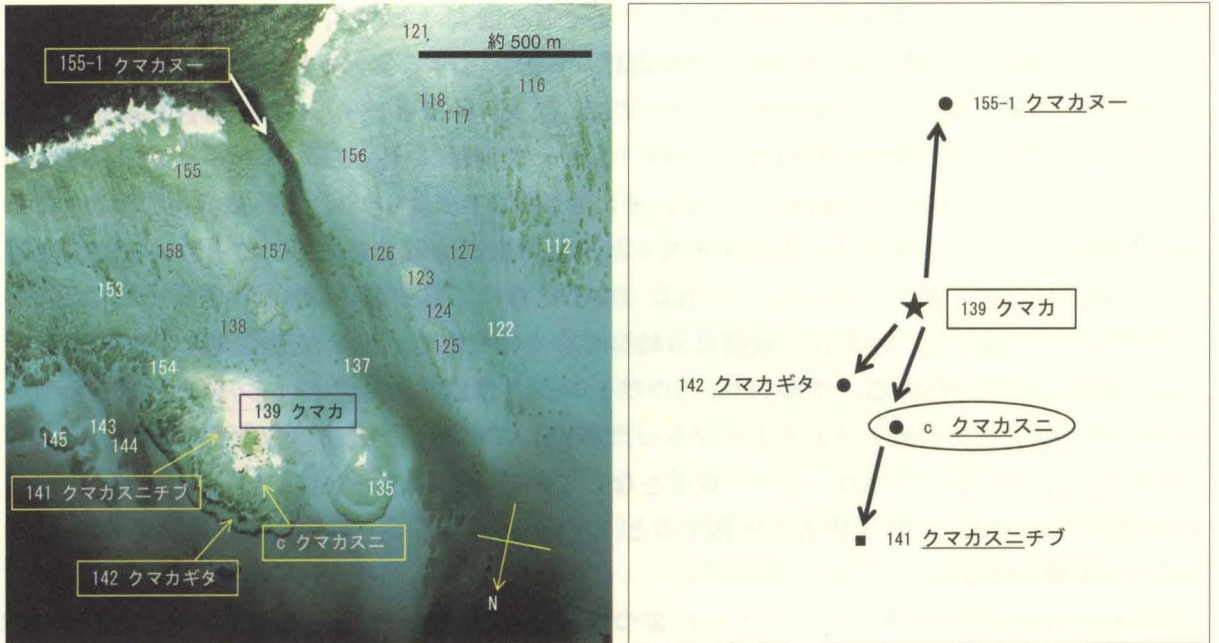


図 8 〈クマカ〉と〈クマカ〉という周辺地名を接頭辞とする地名

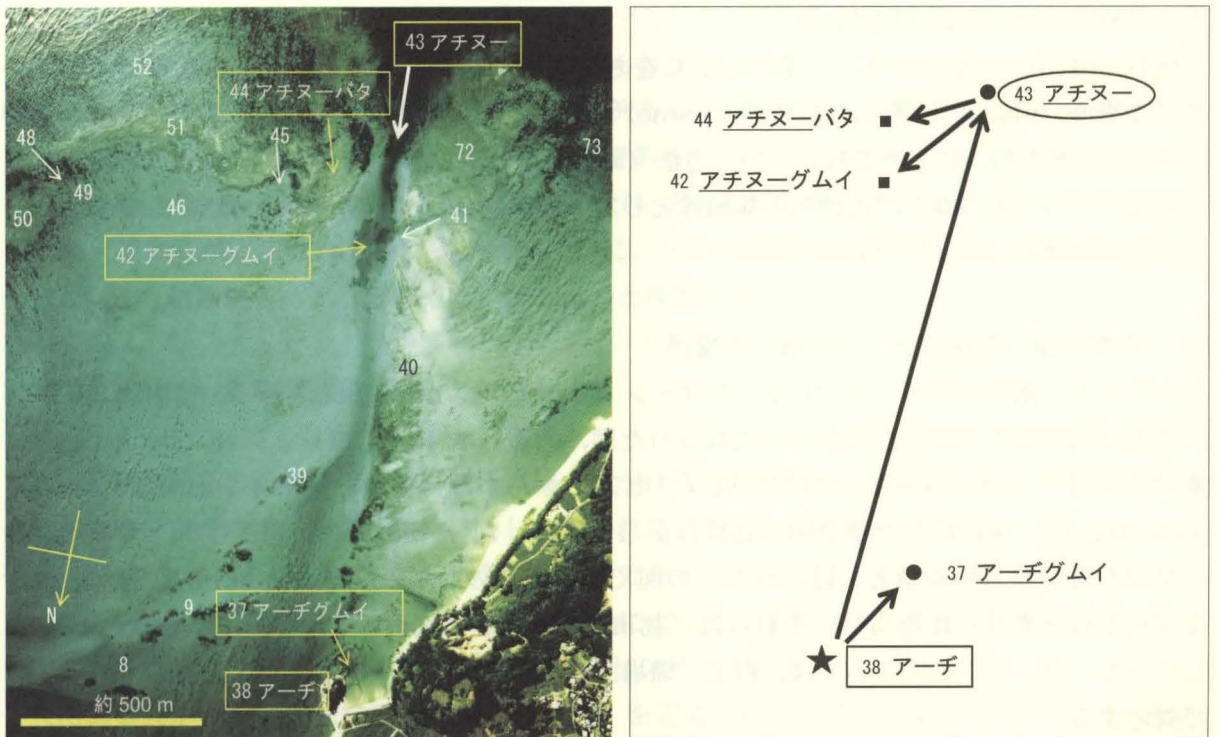


図 9 分岐地名であり結節地名でもある〈アチヌー〉

いる過程で新たに採集された地名である。〈イーマシークラガン〉(117)、〈イーマシーフンズ〉(118)、〈イーマシートンチ〉(121)は、いずれも接頭辞が「イーマシイー」であり、〈イーマシイー〉という地名があってもよさそうだが、現段階、聞き取り調査からそのような地名は採集されていない。

図9は、志喜屋の南にある小島〈アーチ〉(33)とその周辺の地名である。〈アーチ〉の前面(南方)には、イノーのなかを走り外海まで伸びる一筋の水道——《ヌー》(濤)——がある。その水道を〈アチヌー〉(43)という。筆者らの聞き取り調査によれば、〈アチヌー〉は〈アーチヌー〉ともよばれている。〈アチヌー〉の接頭辞「アチ」は「アーチ」が転訛したものである。したがって、〈アチヌー〉と〈アーチグムイ〉(37)は〈アーチ〉(38)の分岐地名である。

〈アーチ〉から〈アチヌー〉が分岐し、さらにその〈アチヌー〉から〈アチヌーグムイ〉(42)と〈アチヌーバタ〉(44)が分岐している。それゆえ、〈アチヌー〉は〈アーチ〉の分岐地名であると同時に、〈アチヌーグチ〉と〈アチヌーバタ〉の結節地名でもある。つまり、ここでは地名が2段階に分岐・派生している。じつは、図8においても、〈クマカ〉→〈クマカスニ〉→〈クマカスニチブ〉と、地名が2段階に分岐しているのである。地名が2段階に分岐するケースは、ほかにもう一つある。すなわち、〈ウフトンジ〉(120)→〈ウフトンジチナフェアナ〉(114)→〈ウフトンジチナフェアナチブラー〉(115)である。2段階に分岐する地名を図式的に表すと、A → AB → ABC という構造をなしている(下線部分が接頭辞)。この場合、ABを2次地名、ABCを3次地名と仮称すると、全地名のうち、2次地名36、3次地名は4である。4次地名はない。

結節地名は全部で17あるが、そのうち3つ以上の分岐地名を有する結節地名は、〈テラザ〉(18)、〈ゼーナ〉(108)、〈クマカ〉(139)、〈ナカトンチ〉(175)、〈ヒクビシ〉(109)の5個である。さらにそのなかで〈テラザ〉は、図7でみたとおり、4つの分岐地名をもつ。5個以上の分岐地名をもつ結節地名はない。

地名(place-name)とは、一定の広がりをもつ空間において、人々によって意味づけされた特定の場所(place)に施された名前(name)である。広大なサンゴ礁空間のなかで、多くの意味づけされた場所に名称を授けていく方法(命名法)の一つとして「結節地名」と「分岐地名」がある——南城市のサンゴ礁地名の接頭辞として「周辺地名」が最多(20.9%)であるのは、以上のように理解してよいであろう。

5.3. 空間認識／意味づけ／「知識」の獲得

ところで、前掲の図7、8、9は、ケヴィン・リンチ(Lynch 1960/丹下・富田訳 1968)の著書『都市のイメージ』のなかに掲載された図、あるいはR. G. ゴレッジ(Golledge 1978、筆者ら未見)のメンタルマップの形成プロセスにかんするアンカー・ポイント理論(anchor point theory)を説明した概念図(高橋ほか 1995、p. 71に転載)を想起させる。図7、8、9の星印を付した「結節地名」は、リンチの図では、都市のなかの広場(square)や駅、道路の交差点やロータリーに相当し、それらは「都市のイメージ」における「ノード」(nodes)を成している。ゴレッジの図でいえば、自宅、職場、商店、レクリエーション地区などの「結節点」に対応する。

広大なサンゴ礁空間において漁民たちが漁場という環境を認識して、ある特定の場所に意味を

見出し、地名を付与していく行為と、都市生活者が日々の行動において都市空間を認識して「都市のイメージ」を形成していく過程や、「メンタルマップ」を豊かにしていくプロセスは、空間のなかで緒事象の「知識」を獲得していくという点で、共通しているといえよう。

6. まとめ

これまでの分析と考察から明らかになった点を列記すると以下のようにまとめることができる。

(1) 奥武島から久高島の手前まで伸びる南城市のサンゴ礁には、3つの明瞭な切れ目——《ヌー》と呼ばれる砂床を切る水道——があり、この3つのギャップによって、サンゴ礁が4分割されている。これらのサンゴ礁の内側には広大なイノーが広がり、多様な微地形が分布している。そのサンゴ礁の海にはおよそ200の地名が刻まれている。

(2) 全地名のおよそ3分の2は、多様な地形語を語基とする。それゆえ、多くの地名のなかに地形にかんする知識が織り込まれている、といつてよい。

(3) 地形語以外の語基として、《ヤー》が最多の13地名を数える。《ヤー》は「家（住処）」を意味するが、《ヤー》を語基にもつ地名では、その接頭辞のほとんどが海産生物である。また、〈コーチャフニイザシイリー〉のように、「舟の出し入れ」を意味する語基をもつ地名が5つある。

(4) 地名の接頭辞で最多は「周辺地名」(20.9%)で、次いで「海産生物」(16.9%)、「サイズ」(11.4%)、「位置関係」(6.0%)、「形状」(5.5%)、「漁撈活動」(4.0%)と続く。他のサンゴ礁地域で比較的多い「陸上地名」(3.5%)は比較的小さい。

(5) たとえば〈テラザ〉という地名を接頭辞として〈テラザチブ〉という地名が形成される場合、〈テラザチブ〉にとって〈テラザ〉は周辺地名である。〈テラザ〉を起点として、〈テラザチブ〉のほかに〈テラザグムイ〉、〈テラザグサ〉〈テラザクビル〉という地名が派生している。本稿では、〈テラザ〉を「結節地名」、〈テラザ〉から派生した地名を「分岐地名」と仮称した。分岐地名を起点にさらに地名が派生する場合は4例ある。結節地名は全部で17あるが、そのうち3つ以上の分岐地名を有する結節地名は5つである。

(6) 地名 (place-name) は、人々によって意味づけされた場所 (place) に施された名前 (name) であるが、広大なサンゴ礁空間のなかに、多くの地名を刻んでいく方法 (命名法) の一つとして「結節地名」と「分岐地名」がある、と理解できる。

おわりに——今後の課題

宮古諸島池間島の漁民、伊良波富蔵氏 (故人) が作製した「八重干瀬^{ヤビジ}絵図」は、サンゴ礁漁場の地名を漁民自身の手で記録したものとして知られている。「日刊宮古」の記事によると、「八重干瀬絵図」(原図) が作られたのは1976年1月である。それには43地名が書き込まれているという。伊良波氏亡き後、郷土史家の前泊徳正氏によって、地名数は、古老の話をもとに98にまで増やされた (日刊宮古1982/南島地名研究センター1983)。

大田徳盛氏が「旧・知念村のサンゴ礁地名図」を完成させたのは1977年9月である。その時、大田氏は「八重干瀬絵図」の存在を知ることはおそらくなかったであろう。なぜなら、「八

重干瀬絵図」が「日刊宮古」に報じられたのは1982年5月であるからだ。

1980年には、読谷村で340地名を記載したサンゴ礁地名図が作られ、『読谷村海岸線保全・利用計画調査報告書』に収録された(地域計画研究所1980)。堀(1979)によって、サンゴ礁地形の民俗分類の研究がなされたのもその頃である。その後の1980年代は、サンゴ礁地名の調査・研究が最も活況を呈する時期である⁽¹¹⁾。このようにみていくと、几帳面な文字で195地名を書き込んだ「旧・知念村のサンゴ礁地名図」は、漁民が作った、最も早い時期に属するサンゴ礁地名図であるといえる。

八重干瀬絵図もそうであるのだが、旧・知念村サンゴ礁の「地名図」には、線描のベースマップの上に地名が記されているだけで、それ以外の説明や解説は一切ない。しかし、その海で活躍していた当時の熟練漁民たちにとっては、それだけで十分であったと思われる。地名を構成する語基(多くは方言地形語)の意味もほとんどの熟練漁民が知っていたにちがいない。それはあまりにも自明過ぎる知識であっただろう。「地名図」のなかのある一つの地名を耳にすれば、その地名の与えられた場所の位置、その場所の環境——地形・底質・潮流・水温など——、そしてその場所でよく捕獲される海産生物やよく用いられる漁法など、漁場にかかわる膨大な知識が咄嗟に脳裏を横切ったに相違ない⁽¹²⁾。

志喜屋は現在でもサンゴ礁における漁業が比較的盛んな地域である。モズク養殖漁業、追込み網漁、潜水鉈突き漁などを営む漁民が多い。しかし、「地名図」が作られた35年前に比較すれば、サンゴ礁の微地形を巧みに利用した網漁など、さまざまな漁撈活動は、間違いなく減少している。別表には未詳語が少なからず残されているが、「地名図」が作られた直後に聞き取り調査が行なわれていれば、未詳語はもっと減らすことができたことだろう。35年間で、人とサンゴ礁とのかかわりは少なからず変化し、その間にサンゴ礁漁場にかんする知識の一部が失われたことは間違いない。

しかし、「地名図」が無かったと仮定してみるとどうだろうか。たとえば地形語彙にかんして、「地名図」が無いまったくの白紙の状態、現在の志喜屋漁民に聞き取り調査をして、3.2でみた多様な地形語彙を採集できたとは考えにくい。「地名図」を手がかりにして聞き取り調査を重ねたからこそ、表3と図5にまとめた豊かな地形語彙は掬い取れたといえる。

かつて熟練漁民たちにとって自明であったサンゴ礁漁場知識を、「地名図」の力を借りて、可能な限り蘇らせること——逆に言えば「地名図」にふたたび命を吹き込む作業——これが筆者らに科せられた課題である。その課題を切り開くには、漁撈活動についての聞き書き、漁撈活動の参与観察、航空写真判読によるサンゴ礁地形分類図の作製と漁場の実地調査とを踏まえた詳細なサンゴ礁漁場図の作製が不可欠である。願わくは、これまで受け継がれてきたサンゴ礁漁場にかかわる知識と技を若い漁民たちに継承していく方法論を漁民たちとの協働で探究していければ幸いである。

本稿で明らかにし得たことは、漁民たちの漁場認識のほんの一端に過ぎず、しかもスタティックな分析にとどまっている。漁民たちの漁場認識の全体像をよりダイナミックに描くことを今後の目標にしたい。

【付記】

本稿の一部は、2012年7月28日、琉球大学法文学部で開催された沖縄地理学会大会において、「漁民のサン

ゴ礁漁場認識——地名を手がかりに」と題して、渡久地・西銘の連名で口頭発表した。「旧・知念村サンゴ礁地名図」に記された地名を構成する地形語彙を明らかにするために、南城市知念で聞き取り調査を実施した。その際、サンゴ礁漁撈に詳しい具志堅榮幸氏（字志喜屋、半農半漁）、親川新次氏（字志喜屋、半農半漁）、喜久里真男氏（字百名、潜水漁師）ならびに親川孝栄氏（南城市文化財案内講師）には多くのことを教えていただいた。また、当時南城市知念中央公民館館長をされていた親川孝雄氏（現・南城市市議会議員）ならびに具志堅区長の大城元栄氏には漁師を紹介いただくなど、たいへんお世話になった。さらに掘信行氏（奈良大学教授）には励ましと貴重なご助言をいただいた。以上の方々に深謝いたします。

末筆ながら、「地名図」を作られた大田徳盛氏のご冥福をお祈りし、ご遺族の方々——弟さんの大田徳勇氏、娘さんの高嶺弘美さん、小橋川由紀子さん、ご長男のお嫁さんの大田初枝さんのご理解に対して厚く御礼申し上げます。今後、大田氏が遺された貴重な「地名図」を若い漁師たちに継承することに役立つような作業を続けていけることを願っています。

注

- (1) 「一覧表」では地名のすべてがカタカナ表記であるが、「地名図」では一部に漢字混じりの表記がみられる。たとえば〈ハンブンガキ〉(151)、〈カマアデク〉(150)は、地名図ではそれぞれ「半分ガキ」「神谷アデク」と表記されている。地名図にみられる漢字表記は地名の語意を解くのに役立つ。
- (2) 「地名」という知識、この表現は河合(2002)からの借用である。
- (3) そのような地名を、地図に記載されないという意味で「不記載地名」といい(井上 1979, p. 30)、また一般に小さい場所に付けられているため「微細地名 (micro-place-name)」とよぶ(柴田 1987, pp. 260–365)。
- (4) 「語基」という用語を使用するにあたって、野村・小池(1992)の『日本語学辞典』(p. 55)を参照にした。山村社会において地名を構成している語彙の分析によって土地の分類を考察した関戸(1989)は「接尾辞」という語を使用している。
- (5) 土地の人々でない外部の人々が付けた地名として、たとえば大航海時代以降の植民地においてヨーロッパ人が名命した地名がある。
- (6) 地名を手がかりにしてサンゴ礁漁場認識を明らかにした研究として、高橋(2004)がある。
- (7) 渡久地(2010)は、奄美大島大和村東部におけるサンゴ礁空間認識を明らかにするため、116 地名の語構成(語基と接頭辞)を分析した。
- (8) この 3 つの地名を含めて、付表において地名番号の欄にアルファベットを付した地名は、「地名図」には記載されてなく、筆者らが新たに採集した地名である(付表の凡例を参照)。なお、〈ヒラビシ〉(d)、〈ナカビシ〉(e)、〈ウフビシ〉(f)は、久高島では、それぞれ〈ペーンシ(南干瀬)〉、〈シムナカンシ(下中干瀬)〉、〈ハガマイビシ〉とよばれている(渡久地・高田 1991, p. 3)。
- (9) 《アデク》は、地域によって《アディク》《アジフ》《アズィキ》《アrik》などよばれ、これまでの報告ではいずれも「タコ(蛸)穴」を意味するが(西銘 2000, p. 102、渡久地 2011b, p. 163 など)、南城市字志喜屋では、タコ穴に限らず他言しない「自分だけの秘密の漁のポイント」を意味するという。それゆえ、《アデク》を語基とする地名はきわめて稀である。その意味で、〈カマアデク〉(150)という地名は、タコ穴など秘密にされるポイントがなぜ地名化するのか、興味深い問題を含んでいる。
- (10) この 12 (10.3%) のなかには海岸地名が含まれる。サンゴ礁の海の地名だけに限定すれば、その割合はもっと小さくなる。
- (11) 奄美・沖縄において、一定のまとまりをもったサンゴ礁地名の記録・研究は管見の限り、およそ 25 ある。その詳細については別稿を準備中である。
- (12) 高橋(2004, p. 111)は、宮古島市佐良浜における研究から、「漁場の地名を知っているということは、その位置のみならず、その海底の状態や生息する生物などの特定の場所に関する多彩な民俗知識をも理解しているといえることができる」と述べている。

文献 (別表の備考欄に引用した文献を含む)

- 井上史雄(1979)：「ミクロの地名学——地名の構造」、『言語生活』、327号、pp. 30–39。
河合香吏(2002)：「『地名』という知識——ドスの環境認識論・序説」、佐藤俊(編)『遊牧民の世界』(講座・生態人類学 4)、京都大学出版会、pp. 17–85。
柴田武(1987)：『方言の世界——ことばの生まれるところ』、平凡社。
関戸明子(1989)：「山村社会の空間構成と地名からみた土地分類——奈良県西吉野村宗川流域を事例に」、

- 『人文地理』、41 巻 2 号、pp. 22-43。
- 高橋そよ (2004) : 「沖繩・佐良浜における素潜り漁師の漁場認識——漁場をめぐる『地図』を手がかりとして」、『エコソフィア』、14 号、pp. 101-119。
- 高橋伸夫・田林明・小野寺淳・中川正 (1995) : 『文化地理学入門』、東洋書林。
- 地域計画研究所 (1980) : 『読谷村海岸線保全・利用計画調査報告書』、読谷村役場企画課。
- 渡久地健 (2006) : 「スニ」、南島地名研究センター (編) 『地名を歩く (増補改訂)』、ボーダーインク、pp. 192-194。
- 渡久地健 (2010) : 「サンゴ礁の民俗分類・地名・漁撈活動」、大和村史編纂委員会 (編) 『大和村誌』、大和村、pp. 801-822。
- 渡久地健 (2011a) : 「サンゴ礁の環境認識と資源利用」、湯本貴和 (編) / 田島佳也・安溪遊地 (責任編集) 『島と海と森の環境史』 (シリーズ日本列島の三万五千年——人と自然の環境史)、文一総合出版、pp. 233-259。
- 渡久地健 (2011b) : 「サンゴ礁の民俗分類の比較——奄美から八重山まで/付論 サンゴ礁漁場の民俗語彙」、安溪遊地・当山昌直 (編) 『奄美沖繩環境史資料集成』、南方新社、pp. 135-184。
- 渡久地健・高田普久男 (1991) : 「小離島における空間認識の一側面 (I) ——久高島のサンゴ地形と民俗分類」、『沖繩地理』、第 3 号、pp. 1-20。
- 西銘史則 (2000) : 『久米島仲里村海物語——海名人のはなし』、仲里村役場。
- 日刊宮古 (1982) : 「八重干瀬の地名」。[南島地名研究センター (編) (1983) : 『南島の地名 (第 1 集)』、新星図書出版、pp. 70-76 に再録]。
- 野村雅昭・小池清治 (編) (1992) : 『日本語辞典』、東京堂出版。
- 堀信行 (1979) : 「奄美諸島における現成サンゴ礁の微地形構成と民族分類」、『第 33 回九学会連合大会予稿集』、pp. 15-16。
- 堀信行 (1982) : 「奄美諸島における礁地形の方名およびその空間構成と地理分布」、九学会連合奄美調査委員会 (編) 『奄美——自然・文化・社会』、弘文堂、pp. 13-21。
- 三浦信男 (2012) : 『美ら海市場図鑑——知念市場の魚たち』、ウエーブ企画。
- 目崎茂和・渡久地健・中村倫子 (1977) : 「沖繩島のサンゴ礁地形」、『琉球列島の地質学研究』、第 2 巻、pp. 91-106。
- リンチ、K./丹下健三・富田玲子 (訳) (1968) : 『都市のイメージ』、岩波書店。(原著: Lynch, K. 1960. *The Image of the City*, Harvard University Press, and M. I. T. Press)
- Battistini, R., Bourrouilh, F., Chevalier, J. P., Coudray, J., Denizot, M., Faure, G., Fisher, J. C., Guilcher, A., Harmelin-Vivien, M., Jaubert, J., Laborel, J., Montaggioni, L., Masse, J. P., Maugé, L. A., Peyrot-Clausade, M., Pichon, M., Plante, R., Plaziata, J. C., Plessis, Y. B., Richard, G., Salvat, B., Thomassin, B. A., Vasseur, P., and Weydert, P. (1975): *Éléments de Terminologie Récifale Indopacifique, téthys* volume 7 numero 1, pp. 1-111. Station Marine d'Endoume, Marseille, France.
- Clausade, M., Gravier, N., Picard, J., Pichon, M., Roman, M. L., Thomassin, B. A., Vasseur, P., Vivien, M., and Weydert, P. (1971): *Morphologie des Récifs Corallien de la Région de Tuléar (Madagascar): Éléments de Terminologie Récifale. téthys* supplement 2, pp. 1-76, Station Marine d'Endoume, Marseille, France.
- Gollage, R. G. (1978): Learning about and urban environment. in Thrift, N. Parks, D. and Carlstein, T. (eds.) *Timing Space and Spacing Time*. Edward Arnold, pp. 76-98.

凡例

1. 語基の音と接頭辞の音の両方に「未詳」が入っている地名は、地名語全体の意味が未詳——したがって語構成も未詳——であることを意味する。
2. 地名欄の亀甲カッコ〔 〕は別称。丸カッコ()は、そこで営まれる網漁の種類。いずれも「旧・知念村サンゴ礁地名図」に記載されている。
3. 備考欄の「地名図」は「旧・知念村サンゴ礁地名図」を指す。「一覧表」は「旧・知念村サンゴ礁地名図」中の地名一覧表を指す。
4. 番号欄のアルファベット(abcdef)は、筆者らの聞き取り調査で新たに採集した地名である。
5. 枝番号(68-1 など)は、「旧・知念村サンゴ礁地名図」に番号が打たれてない地名である。
6. 備考欄の「結節地名(→ 17, 21, 23, a)」は、地名番号17, 21, 23, aの結節地名であることを意味する。
7. 備考欄の「分岐地名(← 18)」は、地名番号 18 からの分岐・派生した地名であることを意味する。
8. 語基の漢字欄のカッコ()は、当てる漢字がない場合で、語意を表す。

別表 「旧・知念村サンゴ礁地名図」の分析

番号	地名	語基		接頭辞(接尾辞)			備考
		音	漢字	音	意味	分類	
1	ハチーグフ	グフ	—	ハチー	蜂嶺	陸上地名	宇山里のハケイトマイ(蜂嶺泊)の前面にあった岩。志喜屋漁港建設で消失。グフは満潮時に隠れ干潮時に顕れる岩
2	ティーチグフ	グフ	—	ティーチ	一つ	数詞	志喜屋漁港建設で消失
3	マカルーグフ	グフ	—	マカルー	未詳	(人名?)	
4	アルチ	未詳	—	未詳	—	—	国土地理院発行の1/2.5万地形図で「アドチ島」、1/5万地形図で「アドキ島」
5	フニイリンザシ	フニイリンザシ	舟入出	欠落	—	—	舟の出入れ口という「機能」が地名となっている。→ 41, 45, 48, 180
6	カラスイシ	イシ	石	カラス	鳥?	(鳥類?)	地名図では「カラス石」。志喜屋漁港建設で消失
7	アカイサー	イサー	石	アカ	赤	色彩	
8	アミイリヤーチブ	チブ	壺	アミイリヤー	網を入れる	漁撈活動	チブ(壺)は凹地
9	アミイリヤーグサ	グサ	未詳	アミイリヤー	網を入れる	漁撈活動	
10	スニサガイ	スニサガイ	曾根下い	欠落?	—	—	スニサガイは、急に深くなる部分。12 と同名
11	ウルーマクブンヤー	ヤー	家(住处)	ウルーマクブ-ン	ウルーマクブ	魚類	ウルーマクブはベラ科であるが種名は未詳
12	スニサガイ (シミンナアナ)	スニサガイ	曾根下い	欠落?	—	—	シミンナアナは、素潜りで追い込み漁のできる深くないところ → アギンナアナ(43の備考)
13	ウイクンサー	クンサー	未詳	ウイ	上	位置(上・下)	
14	シチャクンサー	クンサー	未詳	シチャ	下	位置(上・下)	
15	クスイサーズニ	ズニ	曾根	クスイサー	黒石	色彩	ズニ(曾根)は多義的な語であるが(渡久地, 2006), この場合、イノー(礁池)内の斑礁(patch reef)を指す。ヒシは干上がるが、ズニは干上がらない
16	マクブヌヤー	ヤー	家(住处)	マクブ-ヌ	マクブの	魚類	マクブはシロクラベラ(ベラ科)。36 と同名
17	テラザグサ	グサ	未詳	テラザ	テラザ	周辺地名	分岐地名(← 18)
18	テラザ	欠落(ヒシ?)	—(干瀬)	テラザ	テラザ(マガキガイ)の	巻貝	干潮時に干上がる礁池内の岩盤(ヒシ)。テラザ(和名=マガキガイ)が多く採れる場所だといわれる。結節地名(→ 17, 21, 23, a)
19	ナカダンミー	未詳	—	未詳	—	—	
20	ミーチャー	欠落(チブル?)	—(頭)	ミーチャー	三つ	数詞	テラザ(18)の東にある三つのサンゴ塊(coral heads)
21	テラザクビル	クビル	括れ	テラザ	テラザ	周辺地名	分岐地名(← 18)。テラザ(18)の南に位置。クビルは括れた溝状の地形
22	チンシウサリヤー	未詳	—	未詳	—	—	
23	テラザチブ	チブ	壺	テラザ	テラザ	周辺地名	分岐地名(← 18)
24	ヤナグワー	ヤナ	(岩場)	グワー	小さい	サイズ(大・小)	ヤナはゴツゴツした岩場

別表「旧・知念村サンゴ礁地名図」の分析 (つづき)

番号	地名	語基		接頭辞(接尾辞)			備考
		音	漢字	音	意味	分類	
a	テラザグムイ	クムイ	小堀	テラザ	テラザ	周辺地名	分岐地名(← 18)。クムイは凹地。
25	シラチブル	チブル	頭	シラ	白い	色彩	チブル, チブラー(→ 30)は塊状ハマサンゴなどがつくるサンゴ頭(coral head)。地名図では「白チブル」
26	ムルチブル	チブル	頭	ムル	ムルの	魚類	タマタ(32)東方に位置。ムルはムルータマンのこと。三浦(2012, p. 56-57)によれば, タテシマフエフキ, シモフリフエフキ(フエフキダイ科)である
27	チブルグワースニ	スニ	曾根	チブル/グワー	サンゴ頭/小	造礁サンゴ/サイズ(大・小)	
28	テルビシ	ヒシ	干瀬	未詳	—	—	テラザ(18)の北東に位置
29	シケヤスニグワー	スニ	曾根	シケヤ/グワー	志喜屋/小	陸上地名/サイズ(大・小)	
30	マクブヌヤチブラー	チブラー	頭	マクブヌヤー	マクブの住処	魚類	「マクブ(和名=シロクラベラ)の住処になっているサンゴ頭(coral head)」。→ 25
31	クワチンギタ	ギタ	(崖)	クワチン	クワチンの	屋号	ギタは急崖を意味する。クワチングワーという屋号が宇具志堅にある
32	タマタ	未詳	—	未詳	—	—	国土地理院発行の地形図で「タマタ島」
33	ヂーインカヤーチブラー	チブラー	頭	ヂーインカ-ヤー	ヂーインカ(未詳)の住処	(海産生物?)	
34	ハユービシ	ヒシ	干瀬	ハユー	未詳	(魚類?)	ヒシは, この場合, イノー内の地形的高まりで, 干出する
35	フカヌスニ	スニ	曾根	フカ-ヌ	外の	位置(内・外)	
36	マクブヌヤー	ヤー	家(住処)	マクブ-ヌ	マクブの	魚類	マクブはシロクラベラ(ベラ科), → 16 と同名
37	アーヂグムイ	クムイ	小堀	アーヂ	アーヂ	周辺地名	分岐地名(← 38)。別名「サバグムイ」(筆者らの聞き取り)
38	アーヂ	未詳	—	未詳	—	—	国土地理院発行の地形図で「アーヂ島」。結節地名(→ 37, 43)
39	チヂミ	未詳	—	未詳	—	—	
40	ビタローヤ	ヤ	家(住処)	ビタロー	ビタローの	魚類	ビタローはロクセンフエダイ(フエダイ科)
41	フニンザシイリ	フニンザシイリ	舟出入	欠落	—	—	→ 5, 45
42	アチヌーグムイ	クムイ	小堀	アチヌー	アチヌーの	周辺地名	分岐地名(← 43)
43	アチヌー (アギンナアナ)	ヌー	濤(みお)	アチ	アーヂ	周辺地名	分岐地名(← 38)。アチ=アーヂ。「アーヂヌー」ともいう。結節地名(→ 42, 44)。アギンナアナは, 縄だけで魚を追い込んでいく深いところ → シミンナアナ(12の備考)
44	アチヌーバタ	バタ	端	アチヌー	アチヌーの	周辺地名	分岐地名(← 43)。別名「ヒートゥビサー」(聞き取り調査)
45	フニンザシイリ	フニンザシイリ	舟出入	欠落	—	—	→ 5, 41, 48
46	モミヤマクブヌヤヒレ	ヒレ	平	モミヤ-マクブヌヤ	藻の生える/マクブの住処	海藻/魚類	ヒレ(ヒレー, ビレー)は平らなところ。地名の意味は「藻の生えているシロクラベラの住処になっている平らなところ」となる
47	ナカイノー	イノー	—	ナカ	中	位置(上・中・下)	イノーは礁池または浅礁湖。数少ないイノー地名の一つ
48	コーチャフニイザシイリー	フニイザシイリー	舟出入	コーチャ	未詳	—	メービシ(51)を横断する細い切れ目。→ 5, 41, 45, 180
49	コーチャーチブ	チブ	壺	コーチャー	未詳	—	コーチャフニイザシイリー(48)の内側の深み
50	イシバヤトイズニ	スニ	曾根	イシバヤトイ	未詳	—	岩盤からなる地形的高まり

別表「旧・知念村サンゴ礁地名図」の分析（つづき）

番号	地名	語基		接頭辞(接尾辞)		備考	
		音	漢字	音	意味		分類
51	メービシ	ヒシ	干瀬	メー	手前の	位置(前・後)	二重になったヒシの、手前(イノー内)のほうのヒシ。ヒシは、この場合、外海に面する堤防状の地形(通常のヒシ)に並行して伸びるイノー内の地形である
52	テービシヌウチ	ウチ	内	テービシ-ヌ	二重の干瀬	地形	テービシは二つの(二重の)干瀬を意味する。テービシヌウチは、二つの干瀬に挟まれた部分を指す。
53	ヤナーラ	未詳	—	未詳	—	—	結節地名(→ 54, 55)。地名の付された場所はヒシ(礁嶺)の低まったところ
54	ヤナーラグワー	未詳	—	グワ	小	サイズ(大・小)	分岐地名(← 53)。地名の付された場所はヒシ(礁嶺)の低まったところ。一覧表では「ヤナーラ小」
55	ヤナーラトーミ	トーミ	(平滑地)	ヤナーラ	ヤナーラの	周辺地名	分岐地名(← 53)。トーミはヒシ(礁嶺)前面(外海側)の滑らかな平坦地(地形語)。
56	ウフドーミヌユイサ	ユイサ	寄石	ウフドーミ-ヌ	ウフドーミの	周辺地名	分岐地名(← 57)。ユイサはヒシ(礁嶺)上の転石(reef block)
57	ウフドーミ	トーミ	(平滑地)	ウフ	大きい	サイズ(大・小)	結節地名(→ 57, 178)
58	イビンヤーナガサチ	サチ	崎	イビンヤー/ナガ	エビの住処/ 長い	海産生物/形 状(長・短)	サチは、この場合、ヒシ(礁嶺)の内側に伸びる筋状の地形的高まり(coral alignment)
59	クラガマー	ガマー	(洞)	クラ	暗い	性状(明・暗)	礁嶺背後の枝サンゴ密集帯に位置する
60	ブーラーワチ	ワチ	割	ブーラー	ブーラーの	魚類	ブーラーはキツネブダイ(ブダイ科)。ワチは溝状の地形
61	ブーラーズニ	スニ	曾根	ブーラー	ブーラーの	魚類	
62	ブーラーアナ	アナ	穴	ブーラー	ブーラーの	魚類	
63	ウルー	欠落	—	ウルー	枝サンゴ	造礁サンゴ	結節地名(→ 64)。この場所には枝サンゴが密集する
64	ウルーワチ	ワチ	割	ウルー	ウルー	周辺地名	分岐地名(← 63)
65	タキンチャワチ	ワチ	割	タキンチャ	未詳	—	スニ(岩盤からなる高まり)の間の広々とした砂床
66	ウフندانメーグワーアナ	アナ	穴	ウフندانメー グワー	大田前小	屋号	地名図には「大田前小アナ」
67	イビンヤーナガチブ	チブ	壺	イビンヤー/ナガ	エビの住処/ 長い	海産生物/形 状(長・短)	地名の意味は「エビの住処になっている長い穴」
68	ワナトンチ	トンチ	飛出	ワナ	ワナ	陸上地名	結節地名(→ 68-1)。トンチは、ヒシ(礁嶺)のレベルが低く舟の出入口になるところ。ワナは垣花の旧称「和名警原」に由来か? 本部半島北部(新里)にワナグチという水道名あり
68-1	ワナトンチトーミ	トーミ	(平滑地)	ワナトンチ	ワナトンチ	周辺地名	分岐地名(← 68)。「地名図」に番号が打たれていない
69	アナガマー	未詳	—	未詳	—	—	
70	ミイバルチブラーイシ	チブラーイシ	頭石	ミイバル	新原	陸上地名	チブラーイシは、下部が波の侵食によって括れたキノコ岩(mushroom rock)
71	ヤマトクチグワー	クチ	口	ヤマト/グワー	倭/小	地名/サイズ (大・小)	字新原の前面にある、やや深い広々としたヒシ(礁嶺)の切れ目(outer creek)。那覇港に「倭口」という水路がある
72	ジーマビシ	ヒシ	干瀬	ジーマ	(儀間?)	(屋号?)	一覧表では「ジーマビシ」。字新原前面に位置するヒシ(礁嶺)。アチヌー(43)の西脇をなす
73	ジーマチブ	チブ	壺	ジーマ	(儀間?)	(屋号?)	別名「ジーマイノー」(聞き取り調査による)。ヒシ(礁嶺)背後の深い(3~5 m)広々とした凹地
74	チニングチヌウルーチナ フェアナ	アナ	穴	チニングチヌ-ウ ルーチナフェ	知念口の/ウ ルーチナフェ	周辺地名/漁 撈活動	分岐地名(← b)。ウルーチナフェはさらにウルー(枝サンゴ)とチナフェ(延縄)に分解できるかもしれない
b	チニングチ	クチ	口	チニン	知念	陸上地名	
75	ムルシマビシ	ヒシ	干瀬	ムルシマ	ムルシマ	陸上地名	知念岬南に位置するムルシマ港の前面にある礁嶺

別表「旧・知念村サンゴ礁地名図」の分析（つづき）

番号	地名	語基		接頭辞(接尾辞)			備考
		音	漢字	音	意味	分類	
76	アカヌカサー	未詳	—	未詳	—	—	
77	カーミンクビ (アギンナアナ)	欠落	—	カーミンクビ	亀の首	海産生物	一覧表では「カーミンクビー」
78	ユニ	欠落(ヒシ?)	—(干瀬)	ユニ	砂地	底質	知念岬沖合の台礁(platform reef)。ユニ(砂地)という地名にもかかわらず砂地ではない。砂は失われたのか?
79	ウミナガサチ	サチ	崎(先端)	ウミ/ナガ	海/長	形状(長・短)	知念岬沖合の台礁。ユニ(78)よりレベルがやや低いが、白波が立つ。地名の語意のとおり、干潮時に知念岬から眺めれば、海にある(サンゴ礁の)長い崎(岬)に見える
80	ウミナガサチヌシミンナアナ	アナ	穴	ウミナガサチ-ヌシ/ミンナ	ウミナガサキの/素潜り縄	周辺地名/漁撈活動	分岐地名(←79)。ウミナガサチ(79)の内側(北西側)の間の水路(水深5m以上)
81	トバヤー (アギンナアナ)	未詳	—	未詳	—	—	タマタ(32)西、ユニ(78)の南西にある深いイノー内にある干出しのない斑礁(patch reef)
82	ナカモーラクラガン	クラガン	暗所	ナカモーラ	ナカモーラ	周辺地名	分岐地名(←83)。イノー(礁池)の中に位置する
83	ナカモーラ	未詳	—	未詳	—	—	知念港の南東に位置。イノー内の暗礁間の砂地
84	クルチブル	チブル	頭	クル	黒	色彩	イノー内のサンゴ頭(coral head)
85	ミーラヌヤー	ヤー	家(住处)	ミーラ-ヌ	ミーラの	魚類	ミーラ(またはミーラー)は小型のエイ
86	ウフンダングワースニ	スニ	曾根	ウフンダングワー	大田小	屋号	地名図に「大田小スニ」。タマタ(32)東方の斑礁
87	フェフリヤー [fe:wuriya:]	欠落(ヒシ?)	—(干瀬)	フェ/フリヤー	南の/(波の)折れる	方位(南)/海況(波)	分岐地名(←88)。フリヤー(88)の南側に位置する、白波が立つ斑礁
88	フリヤー [wuriya:]	欠落(ヒシ?)	—(干瀬)	フリヤー	(波の)折れる	海況(波)	結節地名(→87, 90)。知念岬沖合にある白波の立つ浅い斑礁
89	カミズンワチ	ワチ	割	カミズン	未詳	(屋号?)	フリヤー(88)とフェフリヤー(87)の狭間にある狭い深い水路
90	シチャフリヤー	欠落(ヒシ?)	—(干瀬)	シチャ/フリヤー	下の/フリヤー	位置(上・下)	分岐地名(←88)。斑礁。フリヤー(88)やフェフリヤー(87)よりレベルが低い(水深が深い)
91	ウフズニ	スニ	曾根	ウフ	大きい	サイズ(大・小)	やや深い斑礁
92	ヤコーギタグワー	ギタ	(崖)	ヤコー/グワー	未詳/小	—/サイズ(大・小)	ウフズニ(91)の南隣に位置する斑礁
93	カサナーズニ	スニ	曾根	カサナー	未詳	—	地名図には未記載。位置未詳
94	アガチャーヤー	ヤー	家(住处)	アガチャー	イロブダイ?	魚類	イノー内の微細地名
95	ナガシ	シ	瀬, 石	ナガ	長	長さ(長・短)	ヒシ寄りのイノーの中にある筋状の地形的高まり(coral alignment)。高まりの下は溝状地形(sandy couloir)
96	イチフチャー	欠落	—	イチフチャー	息吹き	動詞	ナガシ(95)の南側の溝状地形。地名の語意は「息を吹く」「息を荒げる」で、苦しい追込み漁の様子を彷彿させる
97	ナカワラー (シミンナアナ)	欠落(チブル?)	—(頭)	ナカワラー?	中が割れた(中が無い)	性状	聞き取りから判断すると、真ん中が無いサンゴ頭(coral head)で、マイクロアトール(microatoll)であると思われる
98	サバヌヤー	ヤー	家(住处)	サバ-ヌ	サメの	魚類	
99	カマンタービレー	ヒレー	平	カマンター	イトマキエイ科	魚類	
100	チヂフガー	欠落	—(頭)	チヂフガー	頂が空洞の	性状	ナカワラー(97)と同様のマイクロアトールであると思われる
101	チブラー	チブラー	頭	欠落	—	—	「チブラー(サンゴ頭)の多い場所」の意味か
102	ガーラワチ	ワチ	割	ガーラ	シマアジなど(アジ科)	魚類	ワチは、隙間、割れを意味し、舟の通れる水路。この場合は、サンゴ頭、サンゴ群集の狭間(溝状地形, sandy couloir)

別表 「旧・知念村サンゴ礁地名図」の分析 (つづき)

番号	地名	語基		接頭辞(接尾辞)			備考
		音	漢字	音	意味	分類	
103	ナガリヤーワチ	ワチ	割	ナガリヤー	流れるのある	潮流	102と同じ地形
104	チブラーワチ	ワチ	割	チブラー	サンゴ頭	造礁サンゴ	分岐地名(← 110)。102と同じ地形。広々としてやや深い。底にハマサンゴがある
105	ゼーナヌワチ	ワチ	割	ゼーナ-ヌ	ゼーナの	周辺地名	分岐地名(← 109)。一覧表では「ゼーナヌワチ」、図では「セーナンワチ」
106	クラガンワチ	ワチ	割	クラガン	暗所	性状	地名の場所を空中写真で見ると「暗い深み」ではない
107	ウフトンヂワチ	ワチ	割	ウフトンヂ	ウフトンヂ	周辺地名	分岐地名(← 120)。ウフトンヂ(120)の内側に位置する幅広い砂床
108	スルルチブ (ゼーナ)	チブ 未詳	壺 —	スルル 未詳	キビナゴ —	魚類 —	凹地 結節地名(→ 105, 110, 189)。ゼーナは屋号(瀬名)か?
109	ヒクビシ	ヒシ	干瀬	ヒク	低い	高さ(高・低)	ヒシ(礁嶺)。結節地名(→ 109-1, 187, 188)
109-1	ヒクビシトーミ	トーミ	(平滑地)	ヒクビシ	ヒクビシ	周辺地名	分岐地名(← 109)。ヒクビシ(109)前面(外海側)の平坦面
110	ゼーナトガイ	トガイ	尖り	ゼーナ	ゼーナ	周辺地名	分岐地名(← 108)。 トガイ は、この場合、ヒシ(礁嶺)内側の地形的高まり(coral alignment)
111	アーラヌヤー	ヤー	家(住処)	アーラ-ヌ	アーラの	魚類	アーラ(アーラミーバイ)はクエ、マハタ、ヤイトハタなど(ハタ科)
112	ユドウトサー	欠落	—	ユドウトサー	四度移す	漁撈活動	網を四度移動し追込み網漁をする場所。「ニドウトサー(二度移す)」という地名もあるというが、位置は未確認
113	ウルーウフトンヂ	トンヂ	飛出	ウルー/ウフ	枝サンゴ/大	造礁サンゴ/サイズ(大・小)	ここはヒシの低まった部分(通常のトンヂ)ではなく、サンゴ群集間の広々とした溝状の砂床(sandy couloir)である
114	ウフトンヂチナフェアナ	アナ	穴	ウフトンヂ/チナ フェ	ウフトンヂ/綱 延(延縄)	周辺地名/漁 撈活動	分岐地名(← 120)。結節地名(→ 115)。ウフトンヂワチ(107)付近の延縄をする砂床
115	ウフトンヂチナフェアナチ ブラー	チブラー	頭	ウフトンヂチナ フェアナ	ウフトンヂチナ フェアナの	周辺地名/漁 撈活動	分岐地名(← 114)。一覧表では「ウフトンヂチナフェアナチブラー」、地名図では「大トンヂチナフェアヤー」
116	ヒレグワーワチ	ワチ	割	ヒレ/グワー	平/小	形状/サイズ	
117	イーマシイークラガン	クラガン	暗所	イーマシイー	未詳	—	117, 118, 121の接頭辞をなす「イーマシイー」という地名があってもよいが未確認
118	イーマシイーウフンズ	ンズ	溝	イーマシイー/ウ フ	未詳/大	—/サイズ(大・小)	ンズは溝状の地形。サンゴ群集間の広々とした溝状地形(sandy couloir)
119	グファーマーワチ	ワチ	割	グファーマー	未詳	—	溝状の砂床(sandy couloir)
120	ウフトンヂ	トンヂ	飛出	ウフ	大	サイズ(大・小)	結節地名(→ 114, 115, 120-1)。ヒシ(礁嶺)の低さが高いところ
120-1	ウフトンヂトーミ	トーミ	(平滑地)	ウフトンヂ	ウフトンヂ	周辺地名	分岐地名(← 120)
121	イーマシイートンヂ	トンヂ	飛出	イーマシイー	未詳	—	ヒシ(礁嶺)の低まったところ。
122	フカヤーワチ	ワチ	割	フカヤー	深所	水深(浅・深)	深所(水深 100 m 以上)に棲む魚に「フカヤービタロー」という魚がある。和名はハナフェダイ
123	コーマビシ	ヒシ	干瀬	コーマ	未詳	—	結節地名(→ 125)。クマカヌー(155-1)西脇の岩盤
124	ナカンター	欠落(ヒシ?)	—(干瀬)	ナカンター	真ん中の	位置(上・中・下)	コーマビシ(123)とシチャコーマ(125)の中間に位置する。158と同じ名
125	シチャコーマ	欠落(ヒシ)	—(干瀬)	シチャ/コーマ	下/未詳	位置(上・下)/ 周辺地名	分岐地名(← 123)。クマカヌー(155-1)西脇の岩盤で、コーマビシ(123)の内隣(北西)に位置する
126	アギンナヒレー	ヒレー	平	アギンナ	(安慶名?)	(屋号?)	クマカヌー(155-1)の内側、南脇に位置する岩盤
127	クルチブラー	チブラー	頭	クル	黒	色彩	黒いサンゴ頭(coral head)
128	モーミーヤー	欠落	—	モーミーヤー	藻が生える	海藻	

別表「旧・知念村サンゴ礁地名図」の分析 (つづき)

番号	地名	語基		接頭辞(接尾辞)			備考
		音	漢字	音	意味	分類	
129	ハマヒザアナ	アナ	穴	ハマヒザ	浜比嘉	(屋号?)	地名図に「浜比嘉アナ」。穴は深み, 凹地
130	クーキューアナ (シミンナアナ)	アナ	穴	クーケー	未詳	—	アガリヌ-ヌーバタ(155)にある小凹地。157 と同名
131	アシトクシグワー (シミンナアナ)	欠落	—	アシトクシ グワー	安里後小	屋号	カミズンワチ(89)の南脇にある凹地
132	カミズンヒレー (シミンナアナ)	ヒレー	平	カミズン	未詳	—	カミズンワチ(89)の南脇にある岩盤
133	ヒレーグワー	ヒレー	平	グワー	小	サイズ(大・小)	斑礁間の平らな袋状地形
134	アカビラヤー [カマンタービレ]	ヤー ビレ	家(住处) 平	アカビラ カマンター	未詳 イトマキエイ科	(魚類?) 魚類	砂床内のサンゴ頭
135	シチャギタ	ギタ	(崖)	シチャ	下	位置(上・下)	結節地名(→ 136)。クマカ(139)南隣の班礁
136	シチャギタヌヒレー	ヒレー	平	シチャギターヌ	シチャギタの	周辺地名	分岐地名(← 135)。シチャギタ(135)西脇の深い砂床
137	ミンギヤーグワ	欠落	—	ミンギヤーグア	濁った/小	性状/サイズ (大・小)	クマカ(139)の南。地名の語意は「濁った所」
138	メーダチブ	チブ	壺	メーダ	前田	屋号・人名	クマカ(139)東脇の凹地状砂床
139	クマカ	欠落	—(島)	クマカ	細かい, 小さい?	サイズ(大・小)	結節地名(→ c, 142)。国土地理院発行の1/2.5万地形図で「クマカ島」, 1/5万地形図で「コマカ島」。小さい島の意?
140	チリーグワー	チリー	未詳	グワー	小	サイズ(大・小)	
141	クマカスニチブ	チブ	壺	クマカスニ	クマカスニ	周辺地名	分岐地名(← c)
c	クマカスニ	スニ	曾根	クマカ	クマカ	周辺地名	分岐地名(← 139)。結節地名(→ 141)。クマカ(139)を載せる礁(岩盤)
142	クマカギタ	ギタ	(崖)	クマカ	クマカ	周辺地名	分岐地名(← 139)。クマカ(139)北側の海中の急崖
143	ワリミ	ワリミ	割れ目	欠落	—	—	クマカギタ(142)とシルイユヌヤー(145)の間の砂床。144 と同名
144	ワリミ (シミンナアナ)	ワリミ	割れ目	欠落	—	—	クマカギタ(142)直下の砂床。143 と同名
145	シルイユヌヤー	ヤー	家(住处)	シルイユ-ヌ	フエフキダイ 科の	魚類	シルイユはメイチダイ・シロダイ・サザナミダイなど(フエフキダイ科)
146	カマイチチリヤー	欠落	—	カマ/イチヂリ ヤー	神谷/息切れる	屋号/動詞	図に「カマ(神谷)イチヂリヤー」
147	チブラーグワー	チブラー	頭	グワー	小	サイズ(大・小)	クマカ(139)北方の砂床のサンゴ頭
148	ナカムチャガヤー	ヤー	家(住处)	ナカムチャ-ガ	未詳	(魚類?)	
149	スニチブ	チブ	壺	スニ	曾根	地形	ナカビシ(c)の上にある凹地。接頭辞のスニは, この場合, 台礁(platform reef)を意味する。
150	カマアデク	アデク	(タコ穴, 秘密の漁場)	カマ	神谷	屋号	地名図では「神谷アデク」。アデクは, 奄美・沖縄では一般にタコ穴を意味するが, 志喜屋ではタコ穴に限らず, 自分だけの秘密の漁のポイント。
151	ハンブンガキー	欠落	—	ハンブンガキー	(網を)半分掛ける	漁撈活動	図には「半分ガキー」。網漁をするとき網を全部掛けずに半分を利用することがあるという
152	アカヌカサー	未詳	—	未詳	—	—	クマカ(139)東の礁上に位置
153	タクヌミー	ミー	穴, 場所	タク-ヌ	タコの	海産生物	クマカ(139)東の礁上に位置

別表「旧・知念村サンゴ礁地名図」の分析（つづき）

番号	地名	語基		接頭辞(接尾辞)			備考
		音	漢字	音	意味	分類	
154	イラブチャーヤー	ヤー	家(住処)	イラブチャー	ブダイ科	魚類	スニチブ(149)の西方に位置。急崖
155	アガリヌ-ヌーパタ	ヌーパタ	滯端	アガリ-ヌ	東の	方位(東)	
155-1	クマカヌー	ヌー	滯	クマカ	クマカ	周辺地名	分岐地名(← 139)
156	フェヌ-ヌーパタ	ヌーパタ	滯端	フェヌ	南の	方位(南)	
157	クーキューアナ	アナ	穴	クーキュー	未詳	—	130 と同名
158	ナカンター	未詳	—	未詳	—	—	124 と同名
159	アラジンヌーヒレー (アギンナアナ)	ヒレー	平	アラジンヌー	アラジンヌー	周辺地名	分岐地名(← 161)
160	アラジンヌーフェギタ	ギタ	(崖)	アラジンヌー/ フェ	アラジンヌー/ 南	周辺地名/方 位(南)	分岐地名(← 161)
161	アラジンヌー	ヌー	滯	アラジン	未詳	—	
162	ヒラビシクーキューアナ	アナ	穴	ヒラビシ/クー ケー	ヒラビシ/未詳	周辺地名/—	分岐地名(← d)
d	ヒラビシ	ヒシ	干瀬	ヒラ	平たい	形状	結節地名(→ 162, 163)。久高島での呼び名は「ペーンシ(南干瀬)」である(渡久地・高田1991, p. 3)
e	ナカビシ	ヒシ	干瀬	ナカ	中	位置	アラジンヌー(161)とクマカヌー(155-1)の間の台礁。久高島での呼称は「シムナカンシ(下中干瀬)」である(渡久地・高田, 1991, p. 3)
f	ウフビシ	ヒシ	干瀬	ウフ	大	サイズ(大・小)	クマカヌー(155-1)の南のサンゴ礁。久高島での呼び名は「ハガマイヒシ」である(渡久地・高田, 1991, p. 3)
163	ヒラビシアガリンカヤー	欠落?	—	ヒラビシ/アガリ ンカヤー	ヒラビシ/東向 かいの	周辺地名/方 位(東)	分岐地名(← d)。ヒラビシ(d)の西端, アラジンヌーに面した部分。地名図には「ヒラビシ東ヌカヤー」
164	ンザレー	未詳	—	未詳	—	—	知念岬とウカビシ(166)の間の水道
165	ウカビシモーミーヤー	モーミーヤー	藻場	ウカビシ	ウカビシ	周辺地名	分岐地名(← 166)
166	ウカビシ	ヒシ	干瀬	ウカ	浮かぶ(干上 がる)	性状	結節地名(→ 165, 172)。知念岬北東に位置する, 洲島(sand cay)を頂く台礁。地形地名図には「ウカビ」
167	ハマヒザアナ	アナ	穴		浜比嘉	人名・屋号?	ウカビシ(166)北西の班礁にある溝状の砂床。地名図に「浜比嘉アナ」
168	アザマヌメースニ	スニ	曾根	アザマ-ヌ/メー	安座真の/前 の	陸上地名/位 置(前・後)	スニは, この場合, 小規模な円い班礁。周辺は水深 5 m 前後の砂床。
169	ウカビシシルハマクシア ナ	アナ	穴	ウカビシシルハ マ/クシ	ウカビシシル ハマ/背後		地名の語意は「ウカビシ白浜の背後にある穴」。ウカビシ(166)東側の礁斜面下の谷状地形。地名図には「ウカビシ白浜クシアナ」
170	スーグチアナグワー	アナ	穴	スーグチ/グワー	潮口/小	潮/サイズ(大・ 小)	スーグチは波打際(堀, 1982, p. 17 参照)。知念海洋レジャーセンター東の裾礁の礁斜面下部
171	アザマヌーグワー	ヌー	滯	アザマ/グワー	安座真/小	陸上地名/サイ ズ(大・小)	
172	ウカビヒレー	ヒレー	平	ウカビ[シ]	ウカビ[シ]	周辺地名	分岐地名(← 166)。ウカビシ(166)とその南西隣の暗礁(斑礁)との間の袋状砂床。
173	テンチャナガサチ	サチ	崎	テンチャ/ナガ	未詳/長い	—/形状(長・ 短)	「テンチャ」を接頭辞とする地名(173, 174, 181, 182)が4つあるので, テンチャという地名があってもよさそうだが, 未確認。サキは, この場合, ヒシ(礁嶺)がイノー(礁池)側に突き出た部分(coral alignment)。→ トガイ(110 ゼーナトガイ)
174	テンチャタマイ	タマイ	湾曲	テンチャ	未詳	—	

別表「旧・知念村サンゴ礁地名図」の分析 (つづき)

番号	地名	語基		接頭辞(接尾辞)			備考
		音	漢字	音	意味	分類	
175	ナカトンチ	トンチ	飛出	ナカ	中	位置(上・中・下)	結節地名(→ 175-1, 183, 184)
175-1	ナカトンチトーミ	トーミ	(平滑地)	ナカトンジ	ナカトンジ	周辺地名	分岐地名(← 175)
176	ナカブリ	未詳	—	未詳	—	—	ヒシ(礁嶺)上に位置する。一覧表では「ナカブリー」
177	ブルブル						ヒシ(礁嶺)上に位置する。一覧表では「ブルブルー」
178	ウフドーミハーアガヤ	ハーアガヤ	(浅瀬)	ウフドーミ	ウフドーミ	周辺地名57	ハーアガヤは、聞き取りによれば、「浅瀬」を意味する。当該地名は、ヒシ(礁嶺)に位置する。分岐地名(← 57)
179	イビンヤヌナガヤト	ヤト	(凹地)	イビンヤ-ヌ/ナガ	エビの住処の/長い	海産生物/形状(長・短)	ヤトは礁縁部の深い窪地
180	フニイリンサシイリー	フニイリンサシイリー	舟入出入	欠落	—	—	→ 5
181	テンチャナガヤト	ヤト	(凹地)	テンチャ/ナガ	未詳/長	—/形状(長・短)	→ 173
182	テンチャウフヤト	ヤト	(凹地)	テンチャ/ウフ	未詳/大	—/形状(大・小)	→ 173
183	ナカトンチチニマルヌヤ	ヤ	家(住処)	ナカトンチ/チニマル-ヌ	ナカトンチ/テングハギの	周辺地名/魚類	分岐地名(← 175)。チニマル(=チヌマン)はテングハギ(ニザダイ科)
184	ナカトンチウフヤト	ヤト	(凹地)	ナカトンチ/ウフ	ナカトンチ/大	周辺地名/サイズ(大・小)	分岐地名(← 175)
185	ウルマーヤ	マーヤ	未詳	ウル	枝サンゴ	造礁サンゴ	礁縁部に位置する
186	チヂフガトミヤト	ヤト	(凹地)	チヂフガ/トミ	チヂフガー/平滑地	周辺地名/地形	分岐地名(← 100)。チヂフガトミという地名の存在の可能性も否定できない。一覧表に「チヂフガトミヌヤト」
187	ヒクビシヌヤトグワー	ヤト	(凹地)	ヒクビシ/グワー	ヒクビシ/小	周辺地名/サイズ(大・小)	分岐地名(← 109)
188	ヒクビシバンゾーガニ	欠落?	—	ヒクビシ/バンゾーガニ	ヒクビシ/番匠金	周辺地名/道具	分岐地名(← 109)。バンゾーガニ(番匠金)は大工金=曲尺(かねじゃく)を意味することから推察すると、当の地名は定規のような細い真直ぐな形状をした礁嶺を表現していると思われる
189	ゼーナウフヤト	ヤト	(凹地)	ゼーナ/ウフ	ゼーナ/大	周辺地名/サイズ(大・小)	分岐地名(← 108)
190	チヂグムイ	クムイ	小堀	チヂ	頂?	形態?(頂・底)	周辺に、「チヂ」の付く地名が2つある(186 チヂフガトミヤト, 100 チヂフガー)